

る。

喜久次はこんな説明を要さない。唯腫を凝して視入つたが。電光石火百雷一時に落つるの概あり硝煙彈雨粉骨流血の接戦あり土塊に均しき彼我の斃卒あり、到底人間業とは思はれない。是れが架空的作品ならいざ知らず、事實數千倍激甚を極めたのであつた。勇敢悲壯位で、どう形容されやう乎。こんな空前の大戦争に、兄弟の一人を送り得たのは痛快だ。自分も行きたかつたと、腕節の鳴るやうな感慨に打たれた。

此の場に耐へ兼ねた未亡人は、

『もう参りませう、見てられませんがナ!』と荐りに喜久次の袂を引張つた。

七の

お春は勝坊の世話を姑に任して、小僧相手に見世へ坐つた。こんな賑かな通りで、斯うも來客があるのに（此頃は年中での書入れ時である）何故もツと景氣良くして置かぬのかと訝りつゝ、京辨の愛嬌を湛へて商ひをした。女と見たら巫山戯たがる支那人にでも、お藤のやうにさう怖がりはせぬ。

四日目に、金策の爲め歸郷した喜久次からお藤へ手紙が届いた。其の中にお春への分も同封してあつた。彼女は胸を踊らせて披いて見た。喜久次は様々と故山の春色を述べた後に「僕は久振りで古巢へ歸つて、貴女の嫁入當時を追想して、今昔の感に打たれてゐる。彼の時分は宅も威勢が可かつたが、數年間に随分衰運に傾むたものだ。之れをば挽回せにやならぬ僕の衷情をどうか察して貰ひたい。

定めし貴女は僕の仕打が飽足るまいが、其れは僕も知つてゐる。日外貴女との話があつた時あんなに反対しなかつたら、家は平和、僕も安樂斯う云ふ苦勞はなからうにと思ふと涙が滴れる。けれども過去は是非がないから今後は眞實の弟だと思つて、萬事助力して貰たい。何れ色々御迷惑を掛けるが、不在中は特に宜敷頼みます。貴方が其方にゐてくれるので、どんなにか心強い。お藤が氣儘を云ふても、決して氣にして下さるな。僕が必然貴女の顔は立てるから」と泌々書いて置く。

お春は繰返し／＼讀んで、眼を細めて喜んだ。しんみり五六年既往の追懐に耽りたかつたが、其の時お絹が勝坊を寝かせよと云つたので、彼女は手紙をぐいと内懐へ入れて、いそ／＼立つて行つた。

矢張り喜久次の書狀を讀んでゐたお藤が、入れ違ひに悄悄と降りた。何時もな

ら何とか尋ねるのだが、其處迄は氣が配られず、お春は添乳をしながら考へ込む。貴女の顔は屹度立てるが嬉しい。眞實に悔んでゐるのやらうかとうつらく、勝坊に乳房を噛まれて、(乳は以前からもう出ない)はツとして、

『いゝや、世間に幾らもある習慣、世繼になられた義兄さんに即くのが何故悪からう？ 赤の他人に嫁ぐぢやなし、亡夫も定めし喜んで下さんす。若し何處かへ娶はれたら、此の子の行末がどうなるものか。邪慳なお嫁でも見えたら最後こんな脾の弱い子は殺されて了やる。そやよつて、妾は此處の土に……』と獨言ちつゝ我が子の背を軽く打つ。勝之助はすやく／＼眠つた。

お春が最初亡夫に會つた頃は、都育ちの彼女も未だ婚禮などは飯事のやうに思つてゐた。而して縁談は彼女の知らぬ間に湧いたので、假令百姓はさゝぬと言はれても舅姑小姑も一通りは有る中でどう辛捧が出来やう？ 所詮不釣合だと

親達は容易に受付けなかつたが、餘りの執着に嘗なく断るも道ならず、本人さへ納得したらといふ事になつた。で、素より其の氣のない彼女はとつといつ小さい胸を痛めて、或る日さる易者に相て貰つた。するとお前さんは何とかの星で、此の卦の出る人は、大抵一度は夫に別れる。今思はれてる先きも縁が薄いが、それでも嫁かねば重々の災難に遇ふて、終ひには氣狂ひになる。但し神佛を篤く信じて貞節を盡したら、末には必然本願成就すると言渡された。此の占がお春を百姓の女房にしたのであつた。

彼女の嫁入當時の喜久次は頗る血氣盛なものであつた。丁度中學校を卒へる前の事として、將來の方針に就いて毎夜父兄と議論をしてゐた。權七は彼の云ふことなら、一も二もなく貶す、太一のは學資の要らぬ分別ばかり。其の間に立つて、彼は渡米するとか、開墾事業を始めるとか、農具の專賣特許を受けるとか、煙の

やうな駄法螺を吹いて、東京へさへ行つたら、金の蔓に有付くと利氣んでゐた。お春は始めての晩から彼の姿を眼に止めた。案外品格のある家で、左のみ肩身も狭くなかつたが。何を云つても肝腎の夫は藁仕事か、頬冠して野良行きである。夫れ故、短い上衣に行燈のやうなズボンを書いて、徒歩と汽車で彦根へ通ふ小舅がつい慕はしく、彼の世話だと思し難い不思議に疲勞を覺えなかつた。朝夕眞底から事へて、其れをば彼女は僻事と思はず、他も怪まず、孝行な嫁女ぢやチャホヤされた。喜久次が高等工業へ入つたのも、一つは彼女の思案から寢物語に太一を説いた結果であつた。

易者の八卦が當つたのか、連添ふ夫は半年餘りで召集されて、生きては還らずと従軍した。而して間もなく、嬰兒を抱へた未亡人になつた。お春は子の愛と喜久次の可懐しさに、親里では小舅に嫁が出来るやうなら離縁を貰へと云ひ、此方

でも其の腹が見わたが、姑が折々彼に娶はすといふのを心當てに憂き年月を送つた。けれど喜久次は亡兄に濟まぬの一點張りで、いッかな承知せず。其處へ京都から歸つて来たお藤が譯もなく中兄の味方をして、甘い父親を徳憑かす。摺つた揉つたの揚句の果は到頭故郷を後にされたのだがもう乳がなくても育つと言はれる子連れて、別かれた時の辛さ悲しさはお春の骨身を蝕つてゐた。嫌はれるは皆道理と合點しながら彼女は生な處女の色戀のやうに泣いた。其の後強いて親戚の縁を絆いで来て、舅の葬式などに彼女の盡した親切は並み大抵ではなかつた。お春は肱枕を突いて、うとく／＼現在の喜久次に對照しては、過去の彼を憶浮べると、脊後から密とやつて来て、兩手で眼を掩ふた。

「誰方？」と白々しく云ふと、

「ひーや、僕だ！」

「何ぞすいナ、阿呆らしい」

「近頃黒幕の御無心でござい」と笑つてゐる。

「又餘計な買物お爲やしたのやろ、お父さんに叱られますえ」

「其の通り」

「お幾乎？」

「是れだけ」と片手に力を入れた。

「五十圓か」

「うんにや」

「そんなら五十錢か！」と微笑みつゝ鏡臺の抽出から十圓出してやつた。

是れで本屋の拂ひが出来ると喜んだ其の顔付が今だにあり／＼と眼前に隠現く。

一體彼の人は僅かの事を仰山に恩に着て、夫れをば嬉しがる優しい性質と、屹驚する程大膽な處があつて、年齢の割合には老成てゐた。穩順しいのやら強情なのやら、案じかけると薩張り解らない。亡くなられた舅とは氣質が似合つてあつた所爲であ、仲が轢れたのであらうが、ごうかすると憎たらしい悪戯をした。些細な事に癩癩を立て、御飯を盛ふて差出す茶碗を投付けたこともある。——斯う彼女は色んな物思ひに沈んでゐると、不圖階下で母子の争ふ聲が聞えた。お春は動悸りして、密と起上つた。

七の二

お春は降りて見て、げつそり精を落した。何でも田地を賣つて金策をする積りで歸つた喜久次が、地所よりは荒れる一方の家屋を賣却した方が得策だと考へて、

其の許諾を竊に母に求むべくお藤に書き送つたのである。お絹は眼色を變へて、呷普請當時の苦心を繰返しつゝ異議を唱へる。

『ほら彼奴の志は解つたる。けんども屋材家財賣つてまで、箆筒を買ふ法はない。ほんなにしていなら、何も手放なしやせぬのぢや。新助さんには妾が十分云ふといた。お父さんが一昨年大損しやはつたさかえに、どうぞ内々に頼みますて。然うやらうが、お春、妾はどうしても賣らさんほん。』

『御道理でございます。』とばかりで、お春は袖口で眼元を拭いだ。

『だつて、兄さんの身にも成らなくては可けないわ。色んな思慮があるのだから。』

『どう云ふ思慮やい。屏風を買ふのならお春の金を借つても可いぢやないか。妾は今度歸しとむなかつたのぢや、言ふ事を聞かぬさかぬ。』

『そらお母さんの考へとは違ふわ、丸で。』

『ほんな阿呆な考へがあるもんか。親の恩は死んでから解るほん。妾はもう何時死んでも可い體やさかえに、家屋を賣らうと、食へぬやうにならともう大事ないは。——お父さんが御坐つたら、こんな事はないのに、あゝあ、味氣ない!……』と咽びつゝ、自妄に裏口へ出る。

『まア姑御さん!』と慌て、お春が宥めに行つたが、

『放ツとかい、もう諦めた。』と淋しく笑つて、隣の隠居の處へ出掛けた。

お春は身を顛はして、暫く忍び泣いたが、お藤が涙をかくして何處かへ行きたうなので、

『ふうさん 一寸どうぞ……。』と怵へかねて彼女の裾を捉へた。

『私は嘸ぞ恨まれてやうと思ふわ。』とお藤は紅い眼元でまた坐つた。

『まア、滅相な!』と俯向いて、

『どうぞふうさん、義兄さんの思慮を聽しておくれやす。さうせんと妾、どうもかうもして居れませんか。……貴女も何やおせんか、永らくお親蜜うして戴いてからに、妾の氣もお知り……。』

『え、知つてるから、もう……。』

『そんぢや何ですか。——妾がこんな因果者やよつて、何方へもきつい御心配懸けるばツかり。あゝあ、術ない辛い!』と両手を顔に押當て、打沈んだ。

お藤も我を折つてしんみりと、

『嫂さんはどう思つてやすか知らぬけれど、私は貴女に同情してますよ。だけでも、兄さんはあの氣性でせう、……。』

『えい、それで。』

『それで、私は彼の人の言ふやうにしなきゃならぬし、嫂さんには氣の毒だし、ほんとに口つちまふのよ。京都へ嫁つてからごたくしちや、私かて些とは考へるわ。』

『そらさうですとも。では何ですか、妾にも疑ひが晴れたら、貴女は嫁つておくれやすの？ 妾はふうさん、そんな身の程知らずぢやあませんえ、夫れだけはどうぞ……。』

『だけども、小母さんは矢張り何でせう。』

お春は濕んだ眼を親しさにあげて、

『お母さんは貴女、妾が愚圖々々してるさかえに、親の氣でさうなつたらと思はる、だけとすがナ。妾は固々寡婦を通すが當然、それよか、義兄さんはどう云ふお考へとすやろ？』

『其れは些とも解らないの！』

『ほんまにとすか。』

『虚言いふもんですか。つまり京都へなら安心だと思ふンでせう。だけと……』
『夫れはさうとすね、皆なが喜びますさかえ、えらい鐵面皮しあすけんど。』

『だけとねえ、嫂さん、私が此の間ねえ、それぢや兄上は嫂さんとツて云つたら、そんな事は九で別だ。汝は是れが運命だと思つて、嫁けツて叱付けたのよ。私はもう宅に居たくて堪らない。あゝもう、厭になつちまふ。』と深い溜息を吐いた。

お春は當らず觸らずお藤の機嫌を取るの外なかつた。根が素直な感情の偽られぬ娘だけに、日頃の隔は案外容易く除れたが、後から彼女は段々切ない想ひに逼られた。自分が付纏ふてるので、後日の苦情を恐れる小姑の心持は十二分呑込めるが、其れを知つてゐながら強いて其處へ縁付ける義兄の心底がどうしても解ら

ぬ。家屋まで賣つて敗をとらぬやうに準備へて遣られるのは、自分等に恩義の懸らぬ遠慮であらうが、其の位なら他に立派な縁談が幾らもある筈。母親の言ふ事位はさのみ氣にせぬ人である。兎も角罪の深い事をしてのけた。嗚呼、何たる因果上であらう乎。此の子さへなくば疾くに死んで置いたものをと、我が子を抱締め泣き明す夜もあつた。

併し彼女は決して絶望はしない。此家の爲めに盡すのは職務で、氣隨な底意すら有たずば神佛の加護があらうと思ふ。お春は其の信念で凡ての苦痛に打克つた。而して彼女は親里へと近頃歸京した新助の許へ、喜久次が其方へ行つたら、出来るだけ款待しておくれといふ手紙を出した。

七の三

喜久次が歸京するといふ日、お春は時刻を計つて私かに迎ひに行つた。笑止な程もや／＼して停車場へ入ると、早や旅客はぞろ／＼出て来る。是れはと慌て、プラットホームへ這入らうとすると雑沓の中から、

「瘦さん。」と喜久次が云つた。

お春はびつくり眞紅になつて、

「お歸りやす。」とばかりで靴を受取つた。

喜久次が小荷物の運送方を托して来て、俥でと云ふのを電車が可いとして、彼女は慾張つて手荷物を持たうとした。歸宅前には是非聴きたいと思ふ事があるので、餘程工面をして来たのである。けれども何にも得問はずに、土橋の停留場へ来る途々彼の話を期つたが、喜久次も一寸不在中の母の動靜を質いた丈で、何時行つても京都は佳いとか、東山の麓に畫室を造りたかつたとか、當り障りのない事

のみ云つてゐた。

電車は可成り空いてあつた。お春は膝を並べて腰掛けて、

「親里では別に變化はありませんかいナ。」と低い聲で尋ねた。

「皆さん極く御壯健です。併し小母さんが大層貴女を案じてられた。親は難有いもんだねえ。」

「又愚痴を言はしつて、お氣に觸つたやろ。」と眉を擧める。

「いゝや、何しろ今度はねえ、非常な御厄介になつて來た。それに方々から下らない妹をやる縁談を喜ばれてねえ、僕は赤面しちやつた。まア十月頃にさめときましたよ。」

「さうごすか、新さんは幸福ごすナ。」

「そりやごうだか解らぬがねえ、色々素敵な土産をくれましたッけ、氣の毒な。」

「常時儲けてられますさかえ、彼の人も今度らは貴方……。」

「そんな事はないが、何しろ一杯飲むと非常に面白い人だねえ、多分成功するでせう。」

「何處かへ案内しられましたか。」

「行つたよ、一昨日、傳太郎さんとお光（傳太郎の娘）ちやんと四人でさ。僕が嵐山へは往つた翌る日一人で行つたもんだから、御室へ出掛けてねえ、大騒ぎをやつた。傳太郎さんが先づ縋を脱したから堪らない。彼の人も今日だけは黒幕だつて踊り出す。其處へ行くと僕は駄目だからお光ちやんの手を曳いて、吹雪の裡を歩いたが、其れが又、此處で此の儘死んで了ひたいと思ふ程佳かつた。」

「其れはまア……。」

「お光ちやんは別嬪になりますぜ。どうも京都の女は小娘でも違ふわい。あんな

子供なら欲しいねえ。』

『お轉婆ごすえ。』とお春は強いて微笑んだ。

或る停留場で素晴らしい美装のハイカラが乗込んだ。喜久次は靴を取つて、席を譲つた。チン／＼と動く拍子にお春は「あ、こは」と彼の膝へ力を入れて手を着いた。喜久次何とも感じぬらしかつた。彼女は恥かしいやら妙に嫉妬を覚えるやらで、黙つて了つた。駿河臺下で降ると、

『えらい済みませんけんぞ、一足先き何したうくれやすナ、妾は内密で來たのぞすさかえ。』とさも苦しうに云つた。

『介意はぬぢやありませんか。』

『いえナ 堪忍したうくれやす、どうぞ。』と手荷物を渡した。

小首を傾げて行く喜久次を見送つて、彼女は時間潰しに勸工場へ入つた。色々

土産話は出たが、自分の聴きたい事はどうも問ふ勇氣がなかつたので、もう考へまいと思ひつゝ歩いて、賣品の鏡に映つた自分の窶れた姿にお春は慄然とした。暫くの間は無宿者に成つた様な心地になつて、勝坊の玩具を一つ買ひ、我れを勵まして家に歸つた。すると喜久次は上衣を脱いだまゝ臺所で、土産物の披露をしてゐた。彼女は流石に感づいて、

『まア、お歸りやす。お疲勞も出ませいで……………。』と挨拶をした。

彼もさあらず、

『留守中は難有う、大變な土産でせう。未だ／＼後から小荷物で着くよ。』と調子を合せた。

『新助さんが大儀して下はつたやがなア、妾等にまで氣の毒な。まア、お藤のを見てやらい。』とお絹が云ふ。

喜久次は靴から伏見人形を出しながら、

「勝坊は眠てるな。」

「今先きせんご泣いて、汝。」

「さうごすか、えらい遅りまして。」とお春は疾しい方面を可い加減に避けて、

「ふうさん、一寸拜見、まアすゐな……九齋でお召しやしたら、ぼんに映りが佳ちますえ。」と鶉紹の單衣地を弄る。

「さうだね、少々撲素だと思つたが、新助ごん、中々如才がないツて。」

「喜久、汝はまア、何を云ふやい。聲さんの家へ行つたら、石臼にでもお叩頭せよといふ位やに。」

「それや遣切れない。何だツて構はぬぢやないか、ねえ、嫂さん。」

「さうごすえ、一寸まアふうさんに質いておみやすナ」

「いや、然らぢやない。何ぞ又汝は阿呆なこと喋つて來たやらう、あ、云ふ温
和しい人に。」

「多少は参考の爲め天機を漏してやつた。お藤はからさし意氣地なしだから、此
方が強く出たら直ぐへこたれるが、それでも甘く見せたら女並みに増長るぞ。だ
から時々定木で頭を擲れツて、は、は、は。」と眼を細うして笑ふ。

お藤は怫として逃げて了つた。

「ほんな無茶な事があるもんか、こりや失錯ふた。」

「何の姑御さん、御如才がありませうかいナ。」とお春が執成したが、母はブリ／＼
心配顔で、

「仕様のない子ぢや。ぼいて家屋の話はごうやいなア。」と彼の膝を突いた。

で、喜久次は生眞面目になつて、委細は書面で沙汰した通り家屋は某に幾何

で賣つた。屋敷は都合上何石の年貢で當分貸す事にしたと話しかけるを、お絹は皆まで聴かず、

「郷里の人が嗤らうて居らつたやらうなア、」と鼻を吸りく云ふ。

「其れは心配なさんな。親類でもそら困つて居つた、あゝ空けて置いちや氣遣ひだからねえ。乞食が舞込みやがるし、博奕場にしようし、庭樹なんかも目茶々々だ。僕が賣る氣になつたのも無理はないよ、全く癪に觸つちやつた。」

「然うけ、まア。あれはお父さんも案せてござつたわいなア。」

「だからお母さんが故國へ歸る時分には、僕が復た彼れ以上に建てるよ。」と利氣んで腕を摩つた。

お絹は始めて我が意を得たらしく頷いて、

「お、頼むほん。えらい御苦勞ぢやつた。」と勦りげに云つた。

八の一

喜久次は豫て約束して置いた大工の家へ、重に入れた繪具皿や繪具箱、筆墨、用紙、参考書籍などを運んだ。曾て彼が下宿してゐた事のある二階なので、階下の人々とも馴染の間柄である。

彼が永らく練りに練つた書稿を一瞥して、粗と文字に現はせば斯うである。溢れ落ちる程田吾作連の群つた杯盤狼籍の棧場に、甲の兵士は郷里の娘に絡つた色男、乙は帽子を振つて叫喚く酔漢、丙は徳利から喇叭呑みの剛者、丁は欄干に凭れて拍手喝采の體裁。此等の凱旋軍人諸君が焦點になつて、背景は無数の觀客を通過して、新版歌祭文野崎村の段である。堤や川や梅の咲く住家の舞臺が斜に見えて、「さらば」と遠ざかる、船と堤は隔たれど、縁を引綱一すぢに」とお染の船

が花道の中程へ出た利那の描寫である。今半雙の方は未だ十分纏つてないが、様々に試みた小下繪が凡そ二三十枚はある。こんな複雑な大作は、覺束ないと自らも危みながら、其れをやりたいたいのが彼の性癖なので、喜久次はモデル男を二人備つて來た。

亡兄の軍服を一人に他には學生時代の古服を着せて、窮屈な型に据らせた。彼は最初木炭紙に焼炭を走せて見たが、どうも力が入らぬので、鉛筆を畫用紙に持ち更へて、一生懸命に寫生した。けれどモデルの方より喜久次が先き疲れて、休み／＼で正午迄が關の山であつた。

屋内には靜坐して居られぬほど暖かな好天氣である。喜久次は格堂先生に所用を帯びて出掛けた。そゝるやうな風に吹かれると、彼は此の間京都で、祇園の夜櫻、嵐山、綺羅を飾つた美女の姿が眼に映つた。一度はこんな渦へすツかり投じ

てみたいと思つた時の印象を暫く浮べたが、夫れには成すべきの大事がある。もツとデッサンをやつて置いたらと悔んだり、例の腹稿を推敲したりして歩いた。而して服部坂を上る頃には、色んな連想から頭腦が實感に近付いて、鶴子の問題で占められた。

此の調子だとさう急に成功しさうもないから、彼女は早晚他所の花になつて了はう。然し自分は此の儘空しく退かない。美代子を失つて、剩さへ酷薄な侮辱を受けたでないか。故國で棟梁墜す最中、餘りの淋しさに又手紙を出したが、梨の飛礫。事を分けて貰んだ(刈屋夫婦に)仲裁も鐵砲玉、誰も彼も人を馬鹿にしてる。最早斯うなつては誰が何と囁はうが、飽迄も行つて最後の勝利を得るか、彼等にも自分の嘗めた辛酸を盛返して、破れた二者の平均を保つか、何方かだと、苛々熱情を漲らした。

かと思ふと彼は、げっそり萎れて、あゝあと吐息をつく。色んな苦勞ばかりして、愉快なことは一つもない。慰藉を受ける筈の家庭は反對に慰めて遣らねばならず、お春の始末にも全く閉口だ。何處へも他へは嫁かぬ故尼になとしておくれと親達が風誣つてゐたが、そんな残酷な事は強られぬし、あの年配では孤獨でも堪るまい。と云つて、自分も是れは限つては決して譲歩しない。時々異な女房氣取りで世話されるのが厭で、自己を欺かねばならぬ丈け結局苦痛だ。お藤と仲善くなつてゐるのも今では癪に觸れる。それに母が精神上は没交渉だから、責任と義務の重みで生きてはゐるものゝ、どこまで不自然な繼子になるのかと嘆息して、彼は腰低に格堂の門を潜つた。

すると仕事着のまゝの先生が見えて、

『やア、どうしてたんか、畫學校で話さう。』と葉巻莖を燻しつゝ外へ出た。

喜久次は速に畫工の籠に復つて従ふたが、先生の顔は矢張り曇つてゐる。薫りの高い薄紫の煙が生々した要垣をかすめた。

『御多忙で被居いませう。』と機嫌取りに云ふと、

『あ、バンの繪でな。君は大作に懸つてゐるさうぢやないか。』

『はア、一寸屏風を……。』

『ふうん、旨く描けるかい。』

『怪しいもんでございます。今日も實はデッサンに弱りました。』

『さうだらう、未だ手練が積んでないから、當然さ。多分一局部に凝り過ぎぢやつて、全體を打壊すんだらう。引伸しが又君の素養ではものにならぬ。』

『さうなんです。少々無理でした。』

『一體何を描くんか。』

「戦後の社會が現してみたいと思ふてます。」

「何有。」と眼を光らして彼を見た。

其の内に二人は畫學校へ来た、日影の射した槇の樹の下で、生徒が四五人フトボールをやつてゐた。喜久次は職員室の椅子に腰掛けて、問はる、儘に製作上の趣向を控目に話した。傍に聞いてゐた稻垣は、先生に何か私語かれて出て行つた。格堂は小癩なと云ふ顔付で、

「そんな事で布置が収れるかい。屏風は見下される形になるから、無暗に洋畫に感化れちや可けないよ。」

「ですから色々試みたのですが、どうも平扁に過ぎて纏りません。日外先生がお描きなすつたやうなあゝ云ふ畫題なら何ですが、没遠近のものならやる氣になれませんか、もう止さうかと幾度も失望しました。けれども此の間、京都の景峰

さんのお宅で、シャパンヌの「風船」と「旅鳩」の模寫を拜見しましてね、私は丁度水先案内か、燈明臺かのやうな好い暗示を得たんです。それで……。」

「ちやア半雙の方はどうするンか。」

「戦死者の家庭内か、墓地を描く考へです。何れ背景は芝居の對照に、大々的幽遠な修羅場を現はす心算ですが、齒の浮くやうな雲水で量かすなご厭ですなえ。」と怖々氣焰を吐く。

此の時の扉を開けて、密と覗いた者があつたが、喜久次は氣付かず、先生の動止を額越しに見ながら、

「最初は障子に貼つた戦畫か何かで一寸仄かす積りでしたが——是れはよく田舎にあるんですよ。——併しどうも權衡がとれませんから、矢張り墓地に踞んだ遺族を中心にしたらと思つてます。」

「さうだな、夫れこそずつと大きく暗い色で出したら可からう。」

「此のモデルだけは十分特相を了解んでますからねえ。」

「そりや君、文士が告白小説を描く筆法さ。」

「でも態々盗人になつて、細君を驚かしに入つて、描いた人があつたさうざやありませんか。はゝゝはゝゝ。」

「さうさ。決して悪くはないが、九月迄に出来るかい。」

「九月中には是非仕上げたいと思つてます。」

「ふん！」と先生は鋭く瞰まへた。

其の理由は喜久次に容易く解つた。今学期の成績品を撰抜して、九月に展覧會が催される豫定である。けれどそんなものは彼の眼中にないので、先生の針のやうな感情をいとも突いたに違ひない。是れでは「東洋美術大觀」を借りに來たの

だが、言はぬ方が優しだと彼は失望した。

「何か用か。予は今日忙しいよ。」と果然浴せられた。

「一寸何でしたが、何れまたお願い申します。」と喜久次は氣味悪く立上る。

「まア待て！ 少々話がある。君は刈屋の夫婦に色んな脅迫をするさうだが、あんな事を何時迄も云つてちや可けないぢやないか。」と壓制家の本領を發揮しかけた。

八の二

格堂は八ッ當りに毒吐いて、ぶつ／＼職員室を出て行つた。喜久次は腹が立つやら情けないやら、暫く茫然してると、

「やア、失敬！」と刈屋が熱つた顔で入つて來た。

喜久次はどツきり出會頭に俯向いた。

「先達は手紙を貰つて、つい返事も出さんてるが、君は定めし怒つてやうと思つてた。併しまア勘辨してくれたまへ。」と温和を装つた風で、恪堂の掛けてゐた椅子へ腰を卸す。

斯う云はれると彼は從來の交誼を追憶して、「どうしまして」と答へざるを得ない。鶴子等を知らなかつた以前の心持に復りたくもある。

「君は飽迄も一分を立てる所存かねえ、大概なら止したまへな。——そら僕等も十分同情は持つてるさ。僕は左程關係がないが、家内はあれで何だよ。彼の事件に就いちや喧嘩までしたんだよ。だが丸でもうあの夫人は、色眼鏡を掛けてるから仕方がない。一寸何か云や、直ぐ猿のやうになつて、怒るんだらう。それかといつて、近頃ぢや節々と教會へ行くさうだから、——餘り強くも出られないし、全く

弱つちやつた。」

「どうも御迷惑でした。」

「何しろあんな邪慳な剛慢な婦人に引懸つちや、念入りの御難さ。君は胸糞の悪い目に逢たねえ。」

「さうです、詰りませんです。」

「加之に何ぢやないか、あの鶴子はねえ、金箔付きの馬鹿だよ。君と一方の關係を知つてゐながら、横戀慕するなンざ年齢に似合はないツて。お家騒動を起す女だと云ふ評がある。」と相變らず眼鏡を拭く。眼の縁がちと赤かつた。

喜久次はさなきだに痛恨を覺えて、はアと溜息を吐いた。

「だから君、もう全然放擲したまへ。君は無念晴らしに破れた過去を惜んでるのだから、其の方法は幾らもある。陣立を變へて、うんと彼等を苦しめてやるさ。

——しかし今日は是れで失敬する。是非一度遊びに来たまへな、僕も行くから。』と刈屋はそはく行つて了つた。

斯う唆けるから、自分は却つて鳥を憎まぬやうになる、もう考へまいと吐きつづ彼は畫學校を後にした。大塚の通りへ出て、竹早町の酒屋で正宗を一壘買つて懐へ入れた。而して未だ飲まぬ内から酔つて沈んだやうに、ふらく傳通院裏の墓地へ來た。其の途中で學校(高等工業)の倫理の教師に出會つて、恟とした事があつた。

五六株亭々と聳えた常緑樹の葉越しに日光がキラ／＼墓標へ當つてゐる。微風に伴れて、近所の女學校から進行曲が波立つて來る。不景氣な煙筒から淡い煙が吐き出されて、有耶無耶の界に消えてゐる。植物園や白山御殿の方の黒ずんだ森は、ぼんやり霞んでゐながら然も光線的作用で明るい。ふんわり散つてゐた蔭が

二羽あつた。喜久次は何々信女と刻まれた石碑に凭れて、喇叭呑みの稽古を始めた。

是れからは墓場廻りもする、醉漢の真似もする、芝居の見物もせにやならぬが、時には眞劍勝負がやつてみたい。あゝ、草臥れたと、頭蓋骨の重みで首を振りつづ泌々滅入りこんだ。矢張り考へずに居られぬので、

「僕ほど厄介な荷物を脊負はされて、鞭打たれてる馬車馬があらう乎。成功! 其れがどうしたんだい。出世せにやらぬ義務は何處にもない。金さへ儲けたら可いと思つてる人間は、一面非常な幸福だ。同窓! 大方忘れちやつが、他所の娘を辱めたり、賣笑婦を買つたり藝者に戯れたり中には澁疲の剥けた女と新婚旅行と洒落込んでる奴等を滿更知らぬでもない。親父は壯健だし、兄貴はゐるし、暢氣に勉強しやうと思つてたに、荷物ばかり轉がつて來て、戀にも破れた。苦痛だ

け十人分ほど受けて、青春の佳期を奪はれた。ちよッ、忌々しい、今に見てろ。」と酒精で自己を投出した管を巻いてゐたが、ちらほら人が通るので、うんざり彼は立上つた。

八の三

其の夜喜久次は彼の所謂書室に腹這つて、又もや島夫人に手紙を書きかけた。もう効力のない片音信は懲々だが、矢張り他に方法を見出さぬので、止むを得ず筆を執るのである。不面目極るとは知りながら、此の儘ではどうにも氣が濟まな。當座の酔狂で一寸弄んだのなら、あつさり笑つて別れたが可い、彼等も生身の體だ。そしたら、何の未練らしく長追ひするもんか、境遇の遠隔は豫々考へてゐた。あんな侮辱さへ蒙らなかつたら、疾くに絶念めて置いたものを、理不盡に

拒絶するから、どうも得心がいかない。鶴子をあゝ遠ざける位なら、何故美代子を離間したか。書學校を退けと云つて、何故其れを喜んだか。其の理由を白状しろ！ 腦溢血は或る機會に血管が破裂するのださうだが、彼の手紙の突戻しがどんな働きをしたかも知れぬ。兎も角一戦争挑まれたのだ。其れを避けたさに忍んで和解に行けば、反對に憎言無禮、墮落書生よ色魔よと罵りくさつた。假令死んでも、父の命日と一月廿一日の晩だけは忘れやせぬ。若し是れか男子の對手で、愛の葛藤でさへなかつたら、決してこんな讓歩はせぬのだ。人格を蹂躪されて、誰が黙つてゐるものか。昔の武士なら、手は見せぬぞ、貴様等が蔑視してるやうな下等動物なら、首が幾つあつても足るまいと、彼は屢々悶えた悪感情を抑へて謙つた文句を縷々と連ねた。斯う努力したら、或は希望を遂げ、胸中の苦痛が去らうかと迷ふからである。

もう向ふで読んでゐるだらう、まさか厭とは思ふまいと考へたら、翌る日喜久次は運筆が乗勢んだ。初中終鶴子等が側に立つてゐて、何かと批評してゐるやうな気がした。傳通院の墓地での馬鹿げた真似も役立つて、乙と丙とは一先づ仕上げた。丁は小屋の筵や他の観客に隠れた背中のみで格別造作もないが、厄介な甲の兵士である。郷里の娘になる筈のお藤にモデル男を絡ます譯に行かぬので、男同士で一時代理をさせて、後で又お春に振付ける段取にした。勿論不十分ではあるが、多少精神が高潮すると、彼は洋行でもしてからと思つた。

驟雨の降るしんみりとした、考へさすやうな日である。喜久次は嫂と妹とを連れて来て、小言だら〜、

『昨夜あれほど云つたぢやないか、汝は男に挑まれた形で、斯う手を振放さうとして、幾乎情を含んだ顔を此の位に振向けるんだ。お多福だから、そんな経験は

ないのか。——それ、此方のモデルはこんなにしてるだらう。嫂さんは軍人の格だぜ、色男の氣配さ。さうだ〜』と書用紙の寫生を見せつゝ二人を据らせる。

お春は可笑しさを怵へて、唯々諾々と神妙だが、

『厭よ、こんなこと。』とお藤は眞紅になつて、脹れたり硬くなつたりする。

『其の面は何だい。』

『知らないッたら、もう。』

『ちやア願下げだ。ははは。』と面白さうに笑つた。

近親な者だけに彼は特殊の難易を覺えて寫生してゐると、島から信書が届いた。喜久次は急々階下へ降りて、顔へつゝ封を切つたが、何の事ない、其の儘突退したのである。宛然白刃を浴せられたやうに感じて、反古を引裂き、用もない使所へ行つてから、

「明日また頼むよ、御苦勞だつた。」とモデルに云ひに復つた。

「何處から来たの？ お手紙は。」とお藤は竊ひやうに彼を見て訊く。

「どこでも可いから、早く歸つて、買物に行くんだねえ。」

「まア、憎らしい。顔色が悪いぢやないの!？」と張合ひなく立上つて、彼女は田舎娘の衣裳を脱ぎかける。

先刻から只ならず案じてゐたお春は

「どうお爲やしたの？」とおづ／＼尋ねた。

「何でもないが、一寸用があるから失敬する。」と云ひつゝ、あたふた出掛けて、直ぐまた引返して来た。細雨は歌んであつた。

「お忘れ物ごすか。」とお春は強いて微笑んで、何か知ら探さうとする。

彼はどツかり胡坐をかいて、

「いゝや、一つお願ひだが、嫂さん、これを。」と指で輪を示した。

「へい／＼、お幾らほど?」

「三十圓あまり、大至急だ。恐縮々々。」

「滅相な、一寸取つて参りませう。」と鋭い眼を投げて置いて、小首を傾げて部屋を出た。

「そんなにお金をどうするの?」とお藤が眉根を寄せて云ふ。

「藝者でも買つて来るんさ。」

「馬鹿!」

「其の歪んだ面は何だい。書籍を買ふんだよ、「東洋美術大観」を。」と彼は巻煙草に火を付けて、ころりと横になつた。

「そんなら可いけれど、兄さんのやうにさう秘密にする人は他の者が心配で仕様

がない。何故さう孤獨になるの？だからさ、先刻の手紙をお見せなさいよ。でなけりや、私達はもうモデルになんか成らないわ、餘り水臭いんだもの。』と喋々騒に結はされた頭髪を氣にしながら通る。

『どうなツと勝手にしろ。よく喋るやうになりやがった。生意氣ほざくと、片端から打擲るぞ。』

『え、え、お擲りなさいよ、初中終擲られてるわ。だから仰有い、よう、兄さん。獨りで苦しんでゐないで、よう、ほんとに。』と涙含んで躡寄る。

『言はんく。僕は汝等に心配さすやうな悪事は働いてゐないから、もう歸れ。そんな態度で僕等の腹が質けるもんか、馬鹿野郎。』

『野郎だないわ。』とお藤は取付きかねて、口惜しさうに出て行つた。

八の四

喜久次は無下に手紙を突戻す島の傲慢を憤つたが、こんな製作の最中に盡きぬ懊惱を繰返されては堪らぬと、辛々泣寝入りに激怒を鎮めた。一寸憂さ拂しにピアホールへ出掛けて、序に小川町の紙屋へ寄つて、ザラ紙の荒繩縛りをぶらさげて歸つた。狭い昇降口にある下駄の鼻緒でお春がゐると知つたので、彼は微酔を包んで二階へ上つたら、しく／＼泣いてる聲がする。障子の穴から覗いて見ると、さつぱり掃除をした部屋に俯向いて、お春は或る小下繪を眺めてゐた。其れがどうやら、過日京都の大黒座で取つた野崎村のスケッチらしい。おみつの註に此の女最も氣に入りたり、當世にはあるまじと書いて置いた。あながち嫂は風誣る積りではなかつたが、もう不如のこと自分の胸中を打開けて、彼女の心底も

訊いてみやう。さうしないと不快いと考へつゝ階下へ降りて、彼はお富といふ小娘に鰻井を二つ頼んだ。

『梅月ので可くツて?』

『ごこのでもいゝから、成可く早くねえ。』

『今、来てゐらつしやる方、貴方のお内儀さんねえ。』とませた口を利いて、出て行つた。

喜久次は何氣なく部屋に入つて、

『清潔に片付けてくれましたねえ。』と嫂がござまぎするのを紛らせに障子を開けた。

お春は縮緬の袱紗包を差出して、

『えらい遅なりました。坊がわるさをましてからに、……。』

『何有、……どうも難有う。』と金を懐へ入れて、彼女の側に坐つた。

『妾、もう先前から泣いてたのぞすえ、お腹が立つたやろと思ふて。』と泣顔の辨疏をする。

『何で腹が立つもんかねえ、おみつなんかは皆な作者の假托さ。それでねえ、今日は一つ嫂さん、貴女の心持を話してくれませんか、僕も打開けるから。』

『何をどすえなア。』と袂を膝に重ねてさし俛向く。

『つまり貴女の僕に對する考へをさ。僕は是非共一度聽いて、お互に氣樂にやりたいと思ふのです。』

『妾は無調法者どすさかえに、何かお役に立つならと思ふてますけれど、……。』

『いや、さうぢやない。實は僕も貴女も非常に不運なんです。運命に苛まれてるんです。貴女はどう思つてるか知らぬが、僕は貴女に随分惱まされた。でもさう

でせう。』と紙巻の灰を繪具皿で拂ひながら、

『まア考へて御覽！ 貴女が僕に餘り親切だもんだから、僕は其れを快く受けられなくなつた。殊に花嫁當時は宛然繪のやうに綺麗だし、貴女の心は僕の方へばかり向いてあるやうなもの。あとさき見ずの血氣盛りの僕は、罪な話だと思ひながら、ごんなにか兄貴を羨んだ。けれども、嫂に横戀慕する程馬鹿ではなかつたと見えて、どうにか辛棒して來たツけが、僕も後日成功したら、貴女のやうな美人を娶らうと夫れは憬がれたもんです。而して道ならぬ戀に就いて眞面目に考へて、貴女と義兄弟關係の外一步も出ないといふ修養のつむまでは、口も利かぬ決心だつたのです。其の因襲でね、一昨年あの話のあつた時もある、反對したのだが、其處は悪く思つちや可かせんぜ。』

『えい、え、そりやもう義兄のお心は、鈍な妾でもよう／＼存じて居りますわ。お

若いに似合はぬお方ぢやと、陰ながら感心してきます。それで……。』

『いや、處でねえ、今日は何も彼も打開けるが、一つ手痛いのに引懸つて、全く弱つちやつたんです。』と存りに頭を搔く。

お春は多少お藤から様子を聞いてるので、乘氣になつて根堀り葉堀り尋ねやうとしたが、彼は甲さか乙さか隠話ばかり使つて餘り深くは話さない。

其の内に鰻井が來た。喜久次は嫂に侷めたが、彼女は姑御さんと一緒に戴くと云つて、其の代り尙も戀物語を所望したけれど、彼は、

『のろけを聞かさにやならぬ程嬉しいのなら可いが、花も實もないやぶれかぶれさ。どうです、嫂さん、馬鹿げてるぢやありませんか。』

『滅相な。義兄ならこそ、そんな御辛棒遊ばしたのどすわ。』

『さ、いや、僕だからこんな下手をやつたんです。一寸考へても齒が疼く。つまり

一分が立たぬから、色戀は二の次で、何しろ彼奴等を見返さなくちやならない。其れを餘り大人氣ないと思つて、幾度も頭を下げて行つたが、どうしても駄目だ。それで僕は、貴女に一つ頼みがある。」と眼を逸して鬱陶しい屋外を見た。

お春は可愛い男に口説かれて、嬉しさ餘る羞しさといふ風に俯向きつゝ、

『そらもう妾、お役にさへ立つならどんな事でも嬉しいのぞすけれど、何ぢやありませんか。何ぼ上つ方のお人様でも女さんに二重はなからうさかえ、さう強顏う遊ばすのは深い理由があつて、ございませう。根から解りませんけんぞ、先のお娘さんへの義理やら他に色々御遠慮があつてからに、當分お退き遊ばすのでございませう、さうせんと義兄、女の道が立ちますまいもの。そやよつて、精々御出世遊ばして、未長う御夫婦にお成りやしたら……』

『そりや僕も多少は考へたが、どうも彼等は驕慢で仕方がない。貴女なンの思

想とは丸で違のだ。過失を改めるやうな根性は樂にしたくもないし、僕もあいろれと狎合ふのは嫌ひです。其處でだ、嫂さん。貴女が餘り穏順しい事を云ふから、僕の舌は縫れて了ふが、正直な話が僕は貴女の親切になるのが此頃では一層辛いのです。』

『へエ、そりやもう！』と彼女は恟として、例の淋しい表情をした。

『誤解なさんなよ。』と力を入れて、

『其れが神経過敏な僕の微意です。オア考へて御覽、あれほど眞實を盡したに、結局棄てられたとあつては口惜しいでせう。僕なら猶更だ。だから僕は成るべくなら、何處かへ早く縁付いて貰ひたいと思ふ。……いや是れはずつと以前の話しだがねえ、彼の「三勝半七」の半兵衛はどうです？ 嫂さん。彼の剛腹な親仁奴、少々面憎い感じもするが、何とか云つたツけねえ。

「さうく、半七が事は思はぬが、其方に別る、半兵衛は、能々不仕合せ、——とは思へども、此地に置けば此儘若後家、儕や夫れが可愛い、いとしうおちやる」とか云つて、男泣きするでせう。僕は近頃どうも人の眞心を疑つてるが、それでも他人の親切は無にしたくない。報い難い恩人は出来る丈け作りたくないのです。例令、貴女が僕を義弟として世話してくれるにしても、若し僕が妻帯したら、到底其の……」

「いゝわ、妾に何のそんな……」

「さうは云つても、此の間京都で色々聞いて来た事もあるし、僕はどうも考へると非常に辛いのです。」

「え、え、もうく解りました。お邪魔になるなら何時でも歸らして、……」と袖を絞めて泣いた。

此の時障子の穴から、

「伯父さん、あばよ。」と近頃大分元氣になつた勝坊が云ふ。
喜久次は冷ツとして、

「あ、よく来た、入れ。」と恰も救助船のやうに手招いた。

「どうなすつたの？」と云ひつゝ、お藤が心配さうな顔付で現はれた。先刻からゐたらしい。お春は涙をかくして、顔を見合せた。

「一寸好いことをしてたんさ。——勝坊、鰻飯はどうか、要らないか。」と母親の肩に縋つた甥に云ふと、

「伯父さん、電車頂戴、電車の繪を。」

「まあ、お行儀の悪い。端然とお坐りしてゐるんかいナ、描いておくれやすさかえ。」と何かお藤と目語してゐたお春が我が子を窘めた。

「汝は馬鹿に電車が好きだな。」と笑ひ、彼は有合せの紙片に描きかける。

勝坊は母の止めるも肯かず、鉛筆を強請つて、一緒に蚯蚓のやうな曲線を引く。

「えらい繪が好きとして……。」

「さうらしいねえ。——勝坊は大きく成つたら、何になるか。」

「坊はなア、兵隊さんになつて、畫工になるのやて。」

「そりや可からう。うんと強く成つて、お父さんの敵を打つてやれ。」

「いゝんや、坊はなア、あのほれ、喜久伯父さんの弱虫を……畫工になつて

あのほれ、ふう姉さんがどうやら……。」

「もう可いのよ。」とお藤が燥いで、勝之助の口に蓋をした。

喜久次は腕を拱いた。

九の一

喜久次は兎も角草稿に取懸つた。陽氣の加減で體が怠く、手が思ふやうに動かぬので早く疲れた。展覽會や古畫畫の入札會などへ行つては、とつかは歸つて筆を執つた。寄席や劇場などへもよく出掛けた。而して十日餘りも焼炭を握つてゐたが。牡丹の咲く頃、漸々大きな假張を狭い部屋に横たへた。瘦馬の彼も清々した繪絹に對ふやうになると、獨りで得意がたり成功の曉を空想したり、亡父を偲んだりして、時間の經つのを知らなかつた。

近頃紫崎が時々彼の畫室へ来るやうになつて、今日も夕方立寄つた。

「大分漕付けたねえ、都合で行かないかい。」

「あ、僕も君の宗旨になりさうだねえ。」と喜久次は應じた。

ぶらりと樂師の宮松亭へ行つて、喜久次は盛に目と耳を働かす。様々の表情を介意はず演つて、見臺を叩く太夫の顔付が藝術的に面白い。殊に泣いたり笑つたり散々した揚句湯、を飲む瞬間の急變が面白い。而して泪の催促するやうなデレ／＼も、半可通にセロを聴くより氣が利いてゐるやうだ。時々低徊趣味の畫題に觸れるし、野崎村と來ては差詰め參考になる。彼は島等に追はれて、お春に引張られて、こんな處が好きになつたと、趣味の變化を自ら辨解してゐる。柴崎は毎も洋服を着て胡座をかいて、然も不調和を感じない。時には床本を携へてゐる事もある。中入に寄席を出て、二人は只あるビヤホールで一杯傾けた。直ぐ酔の廻る柴崎は、

「切前の奴さん中々よく語るツて、「宿屋」は僕の十八番だよ、——「親々に誘はれ、浪花の浦を船出して」か」と怪しげな曲節をつける。四邊に多少人がゐる

が、こんな頓着は餘り彼にはない。

「君も少し稽古したまへ、矢張り上方趣味のものだよ。」

「あ、色んな事を思はせるねえ。」

「さうだらう、何時かは巡り降阪の、關路を跡に近江路や——」と來るから、朝顔が君の村を通つたらうぜ、は／＼は／＼。」

「朝顔が事實のたのなら通つてゐる。」と喜久次は卓子で頬杖を突いた。

彼は不圖太平記の二頁に記憶を走せて、遠い過去を追懷した。俊基朝臣以前にもあつたらうが、随分あの街道は憐れな旅人が通つたものだ。時雨もいたくもる山は母の生れた宿場だし、老蘇の森の下草は自分の幼時の樂園であつた。あの松や檜の大木は何百年間、あゝ亭々としてゐるのであらう乎。よく小枝から渡つて、鳥の卵を探りに登つた。一度神主に見付けられて、目の抜けるほど叱られた。此

方も負ぬ氣で卵を投げたら、黄みがダラリと樹の枝にかゝる。鳥はガヤ／＼騒ぐ。神主は怒るまいか、他の子供に喉けて、蛇の生殺しを脚下の幹へのたくらした。其の時は流石にびく／＼ものでベツタリ落ちて、向脛をしたゝか挫傷いた。併し其の返禮の痛快であつた事は、今だに覚えてゐる。家の燕の巢を襲ふた青大將をせしめて、社務所の玄關からワイとも何とも云はずにとツさりと進呈した。――などと容易に盡さない。

「おい 厭に鬱ぐせ。さア、行かう。」と柴崎は勘定を済まして立上つた。

喜久次は夢から醒めて續いた。早月闇の夜の町、晝は利を追ふ戰士の修羅場で、成金と乞食を製造する 兜町を二人は話しながら、街燈の影を踏んで行く。

「君之處の朝顔は素敵だねえ。」と「宿屋」の十八番が云ふ。

「そりや入谷だないか。」

「何有、あのお春とか云ふ女さ。繪具の融いたり肩を柔んだり、羨しい内儀さんだせ。」

「彼女の事が、舊世紀の憐れな女だが、格別はないさ。」

「其の格別が怪しいツて、ふへえ。」

「どうして、誤解すなよ。暫く妹の結婚準備を手傳ひに来てるのだから、全く。」

「ちやアあの一件は、君、どうするンか。」

「ふうん。どうもさうらしかつたツけ。」

「どうツて、君、何か君を怒らしたさうだが、女は後からあツと云ふやうな失策をやるもんだから、まア大目に見てやるさ。」

「別に僕は左程でもないがねえ、妙な羽目になつやつたから、君に紹介して貰つたのが失敗の原因だつたと思ふ事はある。餘り突飛過ぎたねえ。」

『そら構はぬさ。事の結果から見ても、突飛とか軽卒とか非常識とか病的とか、批評するのが野暮だよ。僕等は殆んど世の中に希望がないから、茶化して了つてゐるが、多少頭角を顯はさうと思つたら、奇抜にやらなくちや駄目だ。精力の競争ぢやないか。』と何時になく身を入れて話す。

『ちやア君は僕に同情するンか。』と喜久次も本氣になつたが、日本橋の明るい通りへ出た。

『せぬ事もないさ。併し奥様は近頃弱つてゐるんだよ、先生が歸朝したから。』

『どうして……？』

『まア今晚は失敬しやう。』と柴崎は來合はした電車に乗つた。

九の二

喜久次は烏夫人が柴崎を超越す動機に就いて色々推測して見たが、能きる丈け善意に解して、凡てを藝術に傾倒すべく努めた。夜も畫室の片隅に寝て、屢々跳起きては洗ひ清めた筆をまた汚す。其れが却つて直し甲斐のない事もあり、慌て乗板を踏み外したり飛沫を落したり、繪具を取違へたりして、情々悲觀もした。併し未來の希望が彼を見放さなかつた。

とは云へ未だ重に軍人に懸つてゐるので、前途は尙ほ遠慮である。何しろ四人共同じカーキ色の服装だから、岱緒、黄土、胡粉位で描き分けるのが容易でない。彼は梅雨の霖とぼくと傘を翳して、幾度も招魂社邊へ兵隊を視に行つた。一體こんな畫題は、油繪の方が遙に得策なので、高古游絲、琴絃など多くの衣摺描法はあつても、殆んど此處へは應用されない。それに何れも劣らぬ醜酌の體裁。喜久次は郷里の某々を腦裡に浮べて、個性の發揮に努めたが、其の顔料も亦僅に

岱緒、黄土、朱くらゐの配合である。デルサトオやルーベンス等は「聖母」でも「聖徒」でも常に妻子をモデルにしたと云ふが、夫れは月と朱盆の比較である。寧ろ改作しやうかと、いら／＼神経を尖らせた。

併し又 さう厭な事ばかりではない。時には會心の線も色も出る。労働者が汗水垂らして、日永を託つのは違つて、好きな仕事は辛勞夫れ自身が既に一種の快感である。喜久次は夕方から散方や寄席行きなどする場合もあつて、何かと五體の疲勞を息めた。二三度は運動かた／＼畫學校へも行つた。鶴子は會ふと物は言はぬが、只ならぬ表情をするので、無意味とは思へなかつた。而して近頃耳寄りの話がある。七月廿〇日から一週間逗子の島別邸に於て、畫學校の夏期講習會が催されるとの揭示である。例の先生連が避暑を兼ねて有志者に藝術談を聴かせるので、其の申込所が島夫人とは頗る振つてゐる。彼は早速申込んで、其の日の

到來を期つやうになつた。

喜久次は去年逗子での記憶を新にせざるを得ない。境遇の懸隔から色んな魔がさしたが、一つは自分の遣方も慥に悪かつた。最初刈屋の細君にあつたのも自分の誠意を疑はれる材料になつたらうし、お春の居るのも疑惑を興へるに有力なものだ。何しろ純潔な愛とか戀とか美はしい情操は頭から呪はれたのだから、一通りの忍耐では行かぬ。過去に支配されず反動の作用を避け、ビニリアな思想になつて、自分を彼等の前に現はしたら、夫人も鶴子も喜んで手を握るであらう。成程自分は一時美代子の美貌に迷つたが、何等の關係もなく終つたのだ。情を殺して飽までも斥けたのだ。お春は世上の義理から他人扱ひはせぬ乳房の黒い女で、自分は嫂とより思つてゐない。唯是等の事情を會得せしむる機會が乏しかつたので、今度こそはと望んだ。早く半雙を仕上げて英氣を養ひに行かうと思

ふと、仕事以外の張合ひが出来て、今迄何をしてゐたかと怪しまれる程撻取つた。其の代り喜久次は、嫂の行届いた世話になるのが泌々辛かつた。

朝曇が半ば晴れて、蒸暑くなりさうな日である。彼が背景の隈取をしてゐると、紺紵の單衣をすらりと着たお春が例の如くやつて来た。明暗の際立つて戦つた顔付で、

『御都合で御飯を……！ 今日は一寸御馳走したのだとすえ。』と云つゝ、一葉の端葉を差出した。

一時間ほど後に喜久次は品川行の電車に乗つてゐた。東禪寺前で降りて急な坂道を高輪の通りへ出て、黄ッはい實の見える梅林の木下闇を潜つて、彼は稻垣と標札の掲つた門を潜つた。一體稻垣は生活に屈托のない人で、毎日此處から小石川の奥まで出馬して、畫學校の庶務を無報酬で引受けてゐる篤志家である。曾て

古美術研究の爲め奈良へ行つてゐたが、其の割合に技量は進まず、今では殆んど製作をしない翫賞家である。喜久次の屏風も二三度覽みに来て、やんやと褒めてゐた。青葉の薫りの高い二階座敷で、彼は稻垣に面會した。愛想の佳い奥様が屋敷で收れたのだと云つて、苺に葡萄酒を注ぎつけて持つて來られた。

『此の邊の空氣は可いですねえ。』

『そりや君ン處よりか何だよ、だから時々遊びに來たまへ。』

『難有うございます。』

『あんな大作だから無理はないが、非常に顔色が悪うよ。』

『いゝえ、まア此れを見て下さい。』と彼は先刻お春から受取つた端書を差出した。

『今般内規變更に相成り候に付、折角の御申込みに候へ共、青年男子の御方は御斷り申上候間此段得貴意候 早々』と簡單に書いてあるのだ。

稲垣は一寸見て、きつと眉根を寄せたが、直ぐ其れを引込めて、

『是れは少々酷だが、此の擧行はね、全然島さんの好意から出たのだから、僕等は何にも知らないんだよ。』

『さうですか、ちやア貴方に斯う申すのぢやなかつたのですが、どうも僕は心外だから、こんな馬鹿げたお尋ねに来たのです。畫學校の夏期講習に青年男子を除いて何が残る？ 青年の爲めのプログラムもあつた。』とつい息巻く。

『まア、そんなに怒らんときたまへ、敢て君が申込んだから、斷るやうになつたんでもあるまいから。』

『でも餘りぢやありませんか。僕が大に祝意を表して申込んだに、克くもこんな残酷な謝絶が出来たもんだ。多分先生の壓迫だらうが、飽迄僕の人格を無視して。あ、癪だ！』

『さうぢやない、そりや君の邪推だ。だがね、今日はもう激しちやつるから、悠り沈着かにや可かん。まア、暫く待ち給へ。』と云ひつゝ稲垣は降りて行つた。入違ひに奥様が見えたが、喜久次は間もなく響んだ顔付で退出した。稲垣ばかりはと思つてゐたのに、矢張り格堂には適はない。島等と兩立せぬ事は以前から煩いほど考へてゐたが、つまり自分を侮蔑して、斯う虐待するのだ。何が何でも自分に盲従しない者は凡ゆる利器を濫用して、殺さうとするのが彼の癖だ。そんな偏頗な狹量な、薄徳非道な師匠が何になる？ けれども自分は美代子を棄てさ、れて、鶴子に一杯喰はされて、加之に彼等に反抗を餘儀なくされては堪らぬから、斯う屈辱に屈辱を重ねて来たのだ。……之れと云ふのも皆な島夫人の不人情からだ。自分は彼女に毫も不義は要求しない。若し敵對しては、息の根の止まる處まで行きたくなるから、好意を續けるに苦惱してゐるのだ。それに公衆

の問題をさへ曲げて、自分の面皮を剥いで了ふ。柴崎を探偵に寄越たりして、人を翻弄するのが仕事だと、苛々した頭腦で無暗と考へて、彼は小石に躓きながら歩いた。

のたり／＼と風ぎた海の面には、白帆や小蒸汽などが浮いてゐる。ちぎれた雲の間から夕日がキラ／＼波頭に煌いて目映い。汽車は煙を残し、電車は音を立てて絶間なく、浴衣か何かで往交ふ人や車馬の往來は突飛ばされさうである。喜久次は「もう自妄だ／＼」と吐きながら、打水のした女郎屋の軒下をとぼ／＼彷徨ひ行つた。

九の三

喜久次は酒精の分子が絶えぬ程影が暗くなつた。或る夜母が勝坊等と屏風を覽

に來た時などは、頭があがらぬまでに酔ふてゐた。

『まア、酒を飲んだのけ。』とお絹は呆れて、もう繪を見やうとはしない。

『あ、毎晩斯うだ。』と自妄を云つて、彼は書物を枕に臥る。

『え、ッ、ほんぢやあ春もあ藤も妾に隠しとつたのぢや。一寸たまには可いけんど…………。』

『今晚だけどすわいな、姑御さん。』とお春が側から執成す。

『い、んや、汝はまア黙つてなさい。——あ、喜久！ 汝は何時の間にこんな放蕩者になつたのぢや。今迄は堅い奴ぢやと陰では思ふてゐたに、妾を輕蔑けて、然ら氣儘するのやらうが、お父さんがござつたら其れで濟むかい。はないに酒を飲まにや繪が描けぬのなら、止めてくれ。誰も頼んでゐやせん。皆な汝の…………。』

『もう可いたら、放蕩が能きる位なら、斯う酒を飲むもんか。』

『汝はなア、負ン氣が強過ぎるさかえに、要らざる苦勞をするのぢや。何にも知るまいと思ふてもよう知つてるぞや。世間にはなア、性米親切な人と不親切な人があるで、不親切な人の相手にならんと親切な人に（喜久次は首を振る）——ほいて、何にも甲斐性に合はぬ大望を起さぬが可い。皆な心配掛けて、手前も苦勞ばかりして、それで體が堪るもんか。長い物には巻かれてるよ、……』と涙聲である。

喜久次は母の説法を聴きかねて、

『勝坊、早く歸りやがれ、感々してると擲るぞ。』と繪具を手の甲に塗探つてゐた甥を蹴る眞似をした。

『あゝ、去ぬとも！』と腹立つて、

『坊よ、早う來い。阿呆らしい、こんな奴の處にゐな！』とよろ／＼してゐる勝之助を引立て行く。

『姑御さん、どうぞまアお待ち……。』とお春はござまき後追ふた、

『可いわいなア。其の代り汝、今夜から此處で寝てくれんけ、心配でどうもならぬさかえ。』

『其ればツかりは……。』

『叱りよつたらなア、隅の方に小さうなつてゐさい。辛からうけど、妾の頼みぢや。あんな性分やさかえに、何ぞ業のわいた事があるのやろ。腹が立つても可哀想やでなア、其の恩は妾が着るほん。どうぞ意見して、慰めてやつて下さい。』と密語りつゝ階下へ降りて、大工の家族に何くれ謝辭を云つて、嫁に送られ、孫の手を引いて、お絹はしを／＼我が家を指した。

七日ばかりの淡い月が薄すり射込んで、立懸けてある假張の端へ當つてゐる。夜風がそよ／＼洋燈の火影を散つかす。燈蛾や蚊が夏の景物のやうに、ちらほら飛んで来る。母の言葉に耳を欬てゐた彼は、涙を振つて、有合せた冷水をグイと飲み、酔を醒して、亡父の靈前に對ふが如く坐つた。早く謝罪に行うと悔いてゐると、お春がそは／＼やつて来て、

『何であんな事仰有つたいナ、貴方は。しようもない。』と何時になく碎けて取付いた。

喜久次は振放して、其の態度についての自妄になり、

『解りませんか、親切なお家さん。初中終頼みもせぬ肩を持つて下すつて、お禮を申しますよ。』と意地悪く云ふ。

お春は泣伏した。

『さう泡喰るに及びませんよ。僕は繪一つ碌に描けぬ馬鹿です。加之に一昨日女郎屋へ行つてねえ、てれ隠しに品川の臺場と周囲の懸隔を考へてる間に、あぶなく馬とかを連れて歸るのだつた腰抜けです。お春は一寸顔をあげた。一つのろけを聞かしませうか、お馴染はと云ふから無いといつたら、幾ら僕が獨身でも遣切ない化物が出て来たねえ。御酒はといふから、酒の方が優しだと思つてると、大きな器物がドシ／＼来たねえ。是れはと氣付いて勘定をさすと、六圓某と来る。さア、何の事ない大喧嘩さ。底を敲いても五圓ほどしかないし、此の儘歸ると云つても、容易に貧けず、あたふた逃出したが、僕なんかや女郎も買へないや。あゝ、もう厭になつた。』

『買へない方が……。』

『そんな甲斐性なしが何になるもんか、馬鹿が住むに適した世の中だ。』とまたこ

ろりと横になつた。

『義兄、もう可い加減にお止めやす、姑御さんがお案ぜやすさかえ。』

『案せて貰つても難有くない、面倒臭いやー！』

『何でさうお腹が立つのですか。妾ではどうにも仕様がななし……。』とお春は涙がせきあえなかつた。

十のー

喜久次は辛々半隻の揮毫を了へて、上州の山間へ避暑したが、一日三波石の探勝に出掛けて、暑氣に冒され、休養の旅から逆に腸胃カタルを得て、自然に親しむ暇もなく歸京した。彼は餘り病つた例がないので、家の者は多少心配をしたが、彼は所謂書室の方で二三日臥つた。永の苦心の跡を寝ながら見てゐると、次第に他人の作のやうな心地がして、段々と缺點が眼に着いて來た。五分の力で十分の物を描いた稚氣が溢れて、不調和な點が多く、如何にも焦り過ぎた拙作である。是れでは藝術品とは言はれないと、喜久次は病ひも忘れて考込んだが、結局改作の外ないと思つた。幾ら面倒でもこれだけ頭腦が進んだと喜んで書直す、彼は改作の準備に取懸つた。

是れには母の非常な反對があつたが、喜久次を他を顧みなかつた。併し屋根瓦の溶けさうな暑さで、たゞさへ膠は腐る、汗が動ともすると書面へ觸れる。扇は幾乎通つても、縁日もの、植木か他所の庭樹の梧桐の梢が見える位の部屋に腹這つて、夜も蚊燻を備へて、晩くまで乗板に掉してゐた。夕立のする日は嬉しかつた。近所で床机を出して、涼んでゐる浴衣姿が羨しくもあつた。

二度目の浄書だから、喜久次は左程日數を妻さぬ積りでゐたが、色んな故障に出會つた。お藤の婚禮の支度にもつい關係らねばならず、新助が商用で暫く上京してゐたので、何かと隙を缺き、剩さへ勝坊が猩紅熱に罹つて避病院へ送られた。お春は心勞と看病にげツそり寢れて、一緒に倒れさうになる。

「心配な事ぢや。」と云ひつゝ、母は、妹と代々出掛る。喜久次も見舞ひに行つたり店に坐つたりした。幸ひ一週間餘りで退院したが、近頃の大騒ぎであつた。

而して彼は幾ら奮闘といひ努力といつても身神共に疲れ果て、土用後の酷暑には殆んど弱つた。時々柴崎と大森の濁つた海水浴場へ行つて、ひツちりした肉襦袢に誘惑されるのは、あながち藝術の眼のみではなかつた。唯慰藉と言は、お春が毎も縫物に忙しい中から草花など買つて来ては挿し、茶請が出来たと持つて来る。掃除もしてくれるし、團扇使ひも厭はぬ寔に得難い義姉だが、其處には苦痛がある。過日喜久次は甥の病氣で、お春が宅を去らぬ理由は、自分への野心よりも、子に對する至情からだと思つた。其れは衷心から諒とするが、然らば自分も彼等母子を本家として、一戸を立てさゝねばならぬ。嫂の無限の親愛を受けた報酬としても、自分は彼女の缺を補ひ、其の子に十分教育も施さねばならぬ義務がある。とは云へ未だ何の収入もなく、却つて出費ばかりで、自分だけが覺束ない。それに斯う荷が殖えては、自分も可い加減に疲れた頭腦も投込む懐が欲

しい。何時にして世に出られるであらう乎、容易でないと思へば、彼は氣ばかり焦つて、おちく／＼眠れもしなかつた。

併し夜と朝とは想ひが違ふ。根が暢氣な喜久次は何かと光明を認めて、どうにか斯うにか晝直しの勞作を仕上げた。

さて是れからも一つである。朝顔の盛りは過ぎて、秋の七草が縁側に置かれてある。喜久次は多分今年の間(文部省展覧會の出品期)に、合ふまいと氣遣ふた。以前の調子だと到底駄目だと思つた。併し腹案は練れてあり小下繪も大概纏つてあるから、描けぬとも限らぬし、來月中には此處を引拂らはねばならぬ事情があるので、彼は嫂と甥とを据らせて、型の如く木炭を握つた。

お春は曾て亡夫の墓前に跪いたやうな心地になつて、眞實の涙を零す。其れが例の淋しい表情なので、喜久次も往々實感に陥ちて、藝術化されない場合もあ

つた。勝坊に頑是なく動かされるにも困つたが、デッサンは案外樂であつた。彼の雪舟が三保の松原へ一字を建立した故事は、色んなことを思はせた。

風の涼しい或る初夜の刻、喜久次が草稿に張紙をしてゐると、稻垣が訪れて來た。彼は永らく期待してゐたので、手早く片付けて、汚れた坐蒲團で請じた。

『相變らず勉強するねえ。』

『乗懸つた船ですよ。』と云つて置いて、彼は階下から湯をとつて來た。

『もう構はぬときたまへ。』

『此の鐵瓶ちや構へさうもありませんねえ。どうも失禮です。』と不味い茶を侷める。

稻垣は飲まないで、

『未だこんな事してるんか、大變だな。』

『前のを書直しましたから。』

『そんな話だつたが、介意はず出したら可いぢやないか、間に合はぬだらう。』

『もう覺悟してます、どうせスカですもの。暫く山の中へ行つて來たら、穴だらけになつちやつて。』

『旅行の賜物だねえ、放れて視るから。——ドレ、見せたまへ。』

『宅の方にあります。取つて來ませうか。』

『いや、それにや及ばぬ。——是れかねえ。』と稻垣は小首を傾げて、目下揮毫中の下繪を眺めた。

喜久次は得々然と其の構圖を説明する、左の上に枯葉の揺れた櫟の枝が見えて其の下に故陸軍……云々と刻んだ戦死者の石碑がある。丸鬚のほつれた未亡人が白菊の花と線香を供へて、悄悄墓前に跪いてゐる。水兵服の忘れ形見が帽子

を手にして、叩頭をした刹那の描寫である。此等の中心的人物の背後に、二三灌木があつて、荒涼たる千草原が続く。梢をはらふ嵐に尾花の波はいと寂しさ絶絶に、野乎山乎雲乎雪乎の幽明界に消える。其處へ大和男子が旭の御旗を押立て、勇往邁進する修羅場を現はすので、

『……此の背景がしつくり出たら、棚から牡丹餅です。』と云つて笑つた。

『それは出やうとも、灰色は案外融通が利くからねえ。』

『ですが、大に研究する積りです。ドクイエの「露營の夢」は一寸参考になりましたッけ。』

『さうだらう。大にやりたまへ、君等は是れからだ。』と稻垣は金時計を出してバチツと見て、

『時に、君、此の間の話しねえ。』と眼を光らした。

『はア。』と彼は居住ひ直した。近頃稲垣に頼つて、何かと苦衷を打開けてゐるのである。

『もつと早くと思つたツけが、つい機會がなかつたのさ。處がねね、君が夏期講習會の彼の件を根に有つてるやうぢや困る。そりや僕は大人に同情して、島夫人の意見も質いたさ。けれども、世の中は君の思つたやうな單純なものぢやない。君は人から侮辱されてるとか、虐待されてるとか、厭に拗振てるが、誰も君を憎んでやしないよ。僕等首め大人に君の未來に囑望して、發達させたいと思つてるのだ。けれども時々誤解されるやうな下手をして、打壞してしまふ。夫れが可けない。刈屋君も非常に心配してたよ。』

『さうかも知れませんが。』

『かも知れんぢやない。』と力を入れて、

『君は藏前時代から非常な世話になつて來たんぢやないか。それに今日寄付きもしない。田口先生にしてもさうだ。小池は思ひの外底力がある、叩いてやつたら美味が出ると言つて居られる。それに君は敵のやうに思つてるが、ミア考へてみたまへ、皆な君の爲めになつてるんだよ。近い話が、他の社中とは違つて、君が冒頭から屏風の一つも畫かうとしたのも、偉大な先生の感化を受けたお蔭だ。現代にあつて云ふ見識の秀れた藝術家があるかねえ、……』

喜久次は曾て屢々古今の畫聖と崇めた刈屋の格堂論を聞かされた事を思ひ出した。そんなと思つてゐた時代もあるので、黙頭いてゐると、稲垣は、

『……だから此の屏風にしても、一足飛びに文展なんかと言はないで、先生の指圖を受けて、今度の展覧會へ出してたら可いのだ。すると君も削るやうな無駄骨を折らずに、大に技量も認められる。どうしたツて君、多年門弟になつてゐて、

先生に枯杭して立てるもんか。何處へ行つたつてさうだよ、不従順な男は手腕があつても癩なもんだ。殊に田口先生は自分にかまけてる人達と違つて、幾ら長命しても描き切れぬほど、依頼者があるのに、打遣らかして、何の道樂もせず、後進の誘掖に盡瘁して居られるのだ。僕等が犬馬の勞をとつてるのも、其の高潔な精神に感服して、どうか十二分貢獻させたいと思ふからさ。島さんにしてもさうだよ。皆な藝術を愛する美化された趣味だ。それに君は自分を買ひ被つて、損なことはかりする。」と巻煙草を灰にして勢ひよく饒舌る。

是れには彼も異存はなかつた。首垂れて眼を濕まし、

『ぶまな羽目になつたもんだから、どうも申譯がないのですが、先生は怒つて被居いませうねえ。』

『何有、好意を有つて居られるよ。だから一緒に來たまへ、晩くなる。』

『先生の處へですか。』

『さうさ、僕が今晚やつと都合して貰つて來たのだよ。』と立つて帽子を持つ。『行つても仕方がないでせう。』

『夫れだから君は可かん。先生を煩はさないで何が出来るもんか。』

『では島さんはもう打開けて了つたんですか。』

『迂濶だねえ、君も。前から知切つてられるわ。だから何とかしてやりたいと思つて居られるのだが、君が拗戻てるから仕方がない。まア可いから來たまへ。』と云ひつゝ、さつさと部屋を出た。

十の二

格堂先生の私宅へ來ると、稻垣は一足先きに入つた。喜久次は氣を張つて、銀

河の流れた蒼空を仰いでゐた。やがて書生が呼込んだので、彼は長い縁側をストスト通つた。奥の大座敷は障子が開放されて、瓦斯の光がぱつと明るく、煙草の煙が昇つてゐた。圖抜けて広い床の間には五六尺もある石摺の隸書が掛けてあり、紫苑と葛の生花が到底釣合はぬと見えて、隅の方に寄せてある。達棚には畫帖などの代りに、大英百科全書が氣取つて列んでゐる。喜久次は忘れたほど久振りに此處で、奥様から茶菓を戴いた。

『君は遠いから、もう歸りたまへ。』と先生は稻垣に云ふ。

『さう致しませう。——では小池君、先生の御言葉をよく聽きたまへよ、世の中なかの事は秩序ちつじよを履ふまぬと可いけないから。』と云ひ残して、立つて行く。彼が送らうとする。

『あゝ、それにや及ばぬから、もつと此方へ寄れ！』と格堂はどツかり胡坐をか

いた。

『はア、大分涼しくなりました。……』とあづく躑むり出た。

『うん、今晚こんばんはもう晚おそいから簡單かんたんに話さうが、君は屢々島へ手紙をやつて、脅迫りふはくするさうだが、どうも困るぢやないか。』

『決してそんな事は致しません。』

『ぢやア何故なぜあゝ追究するンか。君は楯たてに突つく氣か、太おい奴だ。』と睨にらまへた。

さては矢張り例の壓迫あつぱくかと、喜久次はぐツたり滅入り込んだ。

『予おれが幾度か夫れとなく注意ちゆういを與あたへたぢやないか。彼の夫人ふじんはねえ、往時まへから熱心ねっしんに美術びじゆつを翫くわん賞しやうして、ライフを充實じゆせつせしめやうとしてる人だ。さう云ふ缺陷けつかんのある人ひとを、其その緣故えんごから苦くるしめちや可かかんぢやないか。』

『はア、どうも……。』

『君はあゝして鬱憤を晴す積りだらう。他人の家庭に苦情を持込んで、害毒を流す痴漢だ。』

『決して、そんな私に……。』と口惜し涙を頬に傳へる。

『所存はないと言ふのか。そんなら何故もツと素直にしない？ 如何にも執拗いぞ。』

『色々紛糾しましたから、お互の爲めだと思つて、ついその……。』

『何有、お互の爲めだ！ 馬鹿野郎！』と握拳で疊を敲いた。

喜久次はもう此の上は假令何でも我慢が出来ない。期待さへなければ恐るゝに足らぬと度胸を据ゑた。先生の前といふ禮義を忘れて、

『お互の爲めです。固々遺恨の鬱憤のてある筈はないが、僕に悪感情が残りや、彼等の爲めにもなりません。』

『コラ、小池、そりや正氣の沙汰か！』

『狂つたかも知れませんが、もう癪に觸つて堪らぬから！』

『何故癪に觸るか。君が悪いんだぞ、他人に非常な迷惑を懸けて！』

『もうどうなにして下さい。最初僕が彼の人に頼んだ事は悪かつたです。併し其の報いは十分受けた。犠牲も拂つた。不義はけし程も働いてゐない。もうどうでも可いんです。』と自妄に體を揺つた。

『はアはアは。』と格堂は卒にゴツと哄笑した。

『どうなすつたのですか、僕は先生にこんなに迄何される理由はないと思ひます、勿論疎遠はしてますが。』

『はアはアはア、アアさう眞氣になるな。君は百姓の悴には一寸似合はぬツて。』

『百姓でも何でも同じことです。』

『まあ可いたら、予が引受けた。島は君を嫌つてはゐないのだから、時機を見て予が斡旋してやるよ。さう失戀さしちや、可哀想だ、ほんとに。』と大きな顔の相好崩して、後輩の苦惱を笑つた。

喜久次はあつと拍子を抜かしたが、斯う云ふ性格の人とはかね／＼知つてゐる。幾ら悪口を叩いても場合に依つては任侠に出て、骨肉以上に子弟を愛された例がないのではない。そんならこそ色んな人物がどう高壓されても、こよなく推服してゐるのだ。其の代り敵の数も多いが、自分は先生に情誼さへあつたら、反抗するあたりか衷心から師事したいと思つて、情に激した失禮を謝した。先生は、世間嘲のやうに、お春の事など碎けて聞いて、明日の午後上野へ來い、島夫人に面會させて、仲裁の勞を執らうと言はれた。

十の三

半ば枯れた蓮の葉が吹く風に搖いでゐる。喜久次は不忍池畔から上野の石段を上つて、何十臺かの俵が給釋と通るのに出會つた。驚いた事には、其處に幾個も知合ひの顔が乗かつてゐた。先づ鈴江が久振りで目に着く、長谷川教師夫婦もゐる。志賀牧師もゐる。其れが何れも禮服の盛装で、轆を連ねて精養軒へ入つて行つた。彼は只ならず思ひつゝ、ぼんやり竹の臺の會場へ來た。普通なら此の展覽會へは自分の作品が出てあり、受付の役などを命せられるのだが、彼は殆んど孤立の形である。先生の在否を目録渡しにきくと、

『未だです。』と變な眼付でにんやりした。

喜久次は陳列品を粗と眺めた。今日は彼岸の中日なので、頗る入出があるに、

場内へは一向入つてゐない。素より大した豫期はないが、それでも餘り不味過ぎる。纔に二枚折の花鳥が一雙あるきりで、大抵は小巾の絹に繪具を塗抹つたばかり、格堂一派の僻だけ叮嚀に真似てゐる。但し風景畫には多少寫生されたものがあつた。彼は「虎を畫いて狗に類すか」と獨言ちて、汚れた白幕の張つた事務所へ行つた。するとツイく喋つてゐた數名の生徒がばったり口を噤んで、一齊に喜久次を視た。

「振つてるねえ、先生達は何故出さんか。」と彼はてれ隠しに「敷島」を出して、只ある椅子に腰掛けた。

「そりや君のと一緒に出すんさ。これだらう、君は。」と色川といふのが握拳を鼻の先きで二つ繼いだ。

「駄目だよ、仕上らないから。」

「でもまア、出すべしだねえ。審査は無論請合つた。觀に来るぜ、おイ。」

「酷だなア。」と乙が呟いた。

「構はぬたら、大に祝盃を擧げやラツて。」

「君等は何を云つてるのか。」

「振つてると云つてるのさ。君は新聞を讀まないかい、それ。」とポケットから新聞紙を取出して、色川が彼に見せた。

花嫁花聲の寫真を載せて、「文學士橋本道之氏(二十九)は何の某の媒酌にて今般貴族院議員〇〇〇の令姪美代子(二十二)と華燭の典を擧られたり。新婦は△△女學校出身の才媛にして、繪畫を田口畫學校に學び頗る堪能の譽あり、因に本日、\、\、\、と記して置く。喜久次は剝られるやうに感じたが、表面だけは平氣を装ふてゐた。

「どうしたンかねえ、君は、丸尾と競争してたぢやないか。」と丙が口を入れた。

「そんな事があるもんか。良縁が調ふて、お目出度い譯さ。」

「美味く言つてるせ、君は愈々疑問中の人物だ。丸尾君はあゝいふ若様だから、君に勝を譲つて、洋行したらう。それに何を感々してるんだ。須らく凶器を提げるか、祝意を表したまへ。」と施毛曲りに色川が云ふ。

「そんな必要はない。」と彼は追れるやうに會場を出た。

思はず精養軒の空を目映く睨んで、チヨツと舌打ちして、喜久次は隠れ處を探しに歩いた。丸尾の事は昨年来殆んど問題にしてゐなかつたが、今朝新聞は來なるとお藤が言つてゐたのは是れで讀めた。美代子の結婚は素より覺悟の前で、寧ろ祝すべきだが、相手が橋本とは少々氣持が悪い。これには何か仔細があらう、第一自分を今日こんな處へ誘き出すにも當るまいと、彼は首を縮めて、谷中の方

へすた／＼行つた。黄ばんだ櫻の葉がちらほら散つてゐた。

恪堂先生は招待席に陣取つて、俯向き勝の島夫人と密々談じてゐる。陳列場には長谷川夫婦の外二三の來觀者があるのみで、カラツと明るく、ヒツそりしてゐる。喜久次を探しに行つた色川が急々歸つて來て、

「墓地に居りましたよ。今、参ります。」

「ふん、さうか。」

「馬鹿に負惜みの強い男ですから……。」と何か云はうとするのを、

「あ、可矣。」と恪堂は目顔で追拂ふた。

喜久次は懷手で徐々現はれた。彼は先刻から苦慮して、島に對する三つの方針を定めて來た。斯うなつた以上は是非共鶴子を得たいといふ憧憬と、所詮彼等は世界が違ふから可い加減に接待はうといふ冷情と、一度はグイと喉頭を擱んでか

ら突飛ばさうといふ敵愾心の異分子である。

『さア、掛けたまへ。』

『難有うございます、どうも失禮致しました。』と四十五度位の角度に叩頭をした。

島夫人は窺れた顔をぼつと赤口に染めて、靦然げに應じたが、彼にはどんな服装であつたか、帯の間の金鏈しか見えなかつた。

『君の心事は素より察するがねえ、島さんの方にも亦無理からぬ點がある。自體君は下らない處に力瘤を入れて、物事を面倒にしてしまふ。併し格別不潔な事はしてゐないやうだから、島さんも君の精神は能きる丈け善意に解して居られる。だから兎も角子が貰はうぢやないか。』と二人の動止を見較べながら格堂が云ふ。

『どうぞさう願ひます。』と彼は答へた。

『是れが君、若い夫人だつたら、それこそ家庭の問題になるよ。無暗と引懸から。』

『田舎のお婆さんですから、可うござんすけれど、おほ、ほ、ほ。』

『それに君は責任もあり未來もある男だから、茲は一つ忍耐したまへ。色んな失敗を演じてこそ、幾平人生の真相が解るのさ。自分の小ぼけた自我に執着して、社會や他人に不平を懷いてゐるやうぢや未だ々々話せない。誰の生涯でも君、殊に藝術家なんかは皆な運命の數奇に弄ばれてるんだよ、造化と功を争はうとするからねえ。其れが厭なら、紺屋の職人で終るのさ。』

『全くさうでございます。』

『しかし君のやうに縁の下へ足を突込みに行つて、縁が動かぬツテ泣いて廻つてゐるなんぞ愚劣だ。——悪い性質ではないよ。其の意志は君の唯一の價値だがね

え、もつと善い方面に轉じたらどうか。今日有爲の青年が區々たる戀情に囚はれてるやうぢや駄目ぢやないか、えい。」

『はア、どうも……』と萎れて頭をかく。

『無論戀を解さぬ奴は俗物だよ。併しさう實感に陥ちて、他人に迷惑を懸けちや可かん。どうも君は解つたやうで解らぬ男だ。惑々ぶらついてるかと思や、執念深く奥さんに苦情を言ひに行く。一體どうしたンか。もうこゝらで目を醒さなくちや仕方がないぞ！』

『どうも其れが……』と彼は密と夫人の顔を見た。

『あの夫れは、小池さんの思想も、段々お變りなすつたでせう。私は始中終貴方の御成功を祈つてるのですから、何かお氣に障つた事がお有なすつたら、どうぞ先生の前で遠慮なく仰有つて下さいまし。』と夫人は澄したものである。

喜久次は袴と胸に應へる一言があるので、どう云ひ出さうかと考へる暇もなく、

『いやもう、そんな陳腐な事は言はぬが可い。徴が生へてる、徴が。』と鋭く格堂が打消した。

『私は最早どうでも可いのです。けれども今迄色々御交際を願つたのですから、何分此上ともお願ひ申します。若し私が他日生涯の目的を達したら、或ひは精神上の恩人かも知れません。』と彼は云はざるを得なかつた。

『さうだ、夫れで可い。君は予の門弟、島様は我々の所謂保護者だ。だから餘計な悶着を惹起して堪るもんか、えい、小池。而して手紙なんかもう出すンぢやないよ。』と云ひつゝ彼の手を握つた。

『はア、出しません。』と云つて、彼も握手の禮を返した。

夫人とは其れを略したが、是れで三人の會見は終つた。喜久次は白幕を潜つて、稲垣の許へ來た。彼は亞鉛屋根の仰窓から射込んだ不平等邊三角形の日影に當りつ、入場切符を數へてゐた。

『どうだつたかねえ、僕は今來たばかりだが……』

『可い加減なもんでした。今日とは少々殘酷ですな。』

『僕も今朝さう思つたツけが、餘り邪推しないが可いよ。』

『え、色々難有うございました。——併しどうも僕は浮ばれない。』と嘆息する。

『まあさう悲觀したまふな。其の代り屹度後には良く成るから。』と慰め顔に云つた。

喜久次が稲垣に何か同情を求めやうとしてゐると、恪堂が事務所へ入つて來た。

披露宴を外して來たらしい島夫人等はぞろぞろ出て行つた。

十の四

美代子の婚禮の夜、喜久次は非常に胸が痛かつた。一體自分は矛盾が多いからこんな馬鹿げた目に遇ふ。斯う惱む位なら、何とかする機會が幾らもあつたものを。つうかかくと他人の言葉に安動して、其れに無暗と固執して、與へられたものも執らず、誘ふにも任せず、却つて骨身を削られて來た。何時迄もこんなにしてゐたら、精神は荒んで、焼石のやうに成つて了ふ。既に業に青春の血は濁つて、暗い方面へ知らず知らず深く入りした。自分が他と何等の交渉もなく單獨に生活されるならば、情の擯斥を惟れ事として、枯淡な生涯を送るも佳からうが、所詮足の地上を放れぬ人間である。だから凡てを忍んで先生に鶴子を周旋して貰つ

て、飽迄生きやうとする生命の木に愛の肥料を施さねばならぬ。五つの子を持つた嫂を氣にするのは、自分の意志が薄弱なからだ。誰も此の點に餘り疑惑を懷いた者はないと痛切に感じた。而して夫れだけ島夫人の態度が齒痒かつた。

階下でも何か知ら取込んで、出たり入つたりしてゐる。喜久次は只さへ眠れず夜半過ぎからはもう頭腦が痺れて来て、壁に張つた草稿の中から妹や嫂や島の母子や格堂や、その他様々の幼影が立代り入代り魔しに来る。其れが皆な眞暗な灰色なので、耳の鼓膜はジン／＼鳴る、手足の皮膚はゾギ／＼寒い。胃の腑も亦痛み出して、腹の皮が背中へ引付ささうで、彼はぼつと氣が遠くなつた。

紅葉の流れる谷川へ水を汲みに下りて、落椿に迄つて眼が醒めた。喜久次は自覺を得た第一次に自己を検してみたが、悍ましい思想の混亂は大方鎮まつてゐる。けれど體が怠くて、矢張り不安動搖の念が徐々襲つて来る。平素になく誰か

が雨戸を繰つて置くので、庇の樋と瓦の間を潜つた太陽が半截の菱形を障子に描いてゐる。紙の破れから枕元へ手毬ほどの光線が射込んで、白い塵埃がぼつと立昇つてゐる。彼は其の刺激にすら耐へかねた。神経衰弱か知らと呟いて、岑々する頭を抱へて、復た蒲團を被つた。すると晝間は滅多に家にゐない親方が上つて来て、例の口癖で、

『旦那、未だお寢みですか。』と云ふ。

喜久次は餘儀なく起きた。

『どうぞ其の儘で、全く済みません。』と云ひつゝ入つて坐つて、親方は桃の實の入墨をした腕を膝に突張つた。

『何かお取込みでしたか。』と彼は頓顔を抑へながら問ふた。

『其れがねえ、旦那、全く面目ねエのでして、………貴方にお尋ねしたら解ら

うと思ひやしてな、昨夜から待つてたんでげす。』

『それぢや、まア言つて御覽よ。能きる事ならお力になりませうから。』と自他を勵ました。

親方は巻舌で威勢よく喋る。彼は義理ある娘をさる弟子に嫁付けて置いたが、其の亭主は市虎肌で方々の浮氣者に騒がれて、女房に空閨を歎たしめてゐた。處がそこに一人の同居者があつて、夫れと近頃出来たと見える。内々嗅付けてゐた亭主は昨夜好ましからぬ濡れ場で、刃物三昧に耽んだ。但し男は素早く後を晦迹す。女房もどさくさ紛れに風喰つた。それで直に八方へ人を走せたが、今だに所在は判らず、亭主は猛り狂つて、重ねて四つにするか、嗅い飯を食はすかと息巻く。

『他の事なら野郎なにかに口は利せぬエだが、全く旦那、儂ア福腹でげす。』と痘

痕面の眼を瞬いた。

喜久次は凝然首垂れてゐたが、

『そんな亭主では姦通罪も不起訴さ。だから二人を早く探し出して、十二分謝罪らすんだねえ、悪いにや定まつてるのだから。』と確信があるかの如く云つた。

『ぢやア野郎が何と鯨張つても大丈夫でせうか、赤い獄衣は。』

『僕は其の道ではないけどもさう思ふ。併し是非其内輪で埒明ける分別をなさいよ。斯うした事件の惹起つた時にはねえ、何に限らずどうも其の四圍に、譯の解つた寛大な、涙も血もある人物がゐないと、一寸した事が大變な禍ひになるものですよ。だから此方の悪い處は十分謝罪つて、早い話が、亭主の其の浮氣とか道樂とかを省みさせるんだねえ。それでも肯かなけりや、小父さんが一番捨身になつて、それほど大事の女房なら何故もツと大事にしなかつたと云つておやりなさい

い。何だか世の中が厭になつた。」

『お若い方にこんな形無しぢや全く済みません。難有うございました。』

『何有、そりや些とも構はぬが、今日は非常に疲れてるもんだから、悪く思つちや可けませんよ。——後に富ちやんに、一寸宅まで行つて貰つてくれませんか、朝飯を持つて来いッて。』と彼は腰を擡げた親方に頼んだ。

親方が早呑込みに出て行つた後、喜久次は仕事で空虛を満たさうと草稿に懸つてゐると、お藤が風呂敷に包んだ提げ箱を持つて、悄悄肩身を窄めて入つて来た。

『嫂さんはどうしたンかい。蒼い顔してるせ。』

『私が! 兄さん、そんなにお悪いの?』とネルの單衣の袖で眼を抑いた。

『いゝや、一寸頭と胃が痛むだけだ。餘計な事考へまいぞ。』と例の虚勢を構へて

彼は粥や鶏卵を食しつゝ、妹の動止を睜つた。

お藤は何か訴へるやうな顔付を背向けて、

『私、懸命で此處へ来たのよ。だからどうぞ御免なはさ。』

『そんな理由はないが、夫れとも何か覚えがあるンか。』

『え、兄さんは嘸ぞ辛いでせうねえ。』

『僕は何ともないが、汝の舉動は怪しいぞ。』と其の聲は思はず鋭かつた。

『ごうも濟まないのだから、堪忍して頂戴! どうぞ!!』とあるく云ふ。

斯う言はれると、喜久次は必中甚だ穩かでない。昨日から橋本とお藤、而して美代子と、何か其處にあやがありさうに想像されたが、まさか別條はあるまい。早く縁邊を定めて置いて可かつたと思つてゐた。併し餘り意想外に謝罪られるので、彼は頭腦がムシヤクシヤして来た。

「コラ、お藤！ 汝は堪忍々々ツて、何を謝罪なのだ？ さう謝罪のなら、只一つ訊く事があるから、正直に答へてくれ。汝は橋本と何か……。」

「そんな事、何ともないことよ、——唯繪を見られたいけよ！」

「繪を見られた！——何か僕の習作でも見せたのか。」

「いゝえ、兄上の不在に一寸見られたのよ。たゞ夫れだけ……！」

「そんなら、何もさうあわくるに及ばぬぢやないか。僕はどうも變な氣持がする。橋本の奴、何か一度、義務的に結婚を申込まにやならぬやうな藝當をやつたぢやないか知ら。……：……：……：けれども婦徳に係るやうな事さへ無けりや可いさ、過去は是非がない。」と頭を抱へて横になつた。

お藤は涙に咽びくそんな心配は微塵もないが、無下に謝絶るとは生意氣だ、身の程を知らぬと鈴江に散々風説られた。而して斯う成らねば可いがと、春頃か

ら私かに案じてゐた。其れが悲しさ無念さにあんなに惱んだので、橋本は別に何とも感じなかつた。が、縁付く位ならあゝ云ふ處は前からの経緯もあれば、もつと宅にゐたいと思つたけれど、今度の決心をした其の心は——橋本等の婚禮までに喜久次にも妻帯を望んで自分も早く嫁付かうと考へた。而して打解けて見れば矢張りお春の心根が餘りに柔順らしいので、成るべくなら彼女をともしつた。併し斯うなれば意地もあらう、男の體面にも係らうから、彼等を見返すやうな立派な家庭を作つて貰ひたい。之れは思案に餘つて嫂とも相談したが、早晩京都へ歸るか、夫れとも母の望みが許されるなら別居するか、何れにしても、勝之助を一廉の人物に仕立てて貰ふを樂しみに働くと、言つて泣いたと語る妹の容子は、喜久次が顛へる程情に激してゐた。彼は引續き湧く感動を鎮て、

「そりやお藤、僕の顔の燃える話だ。此の問題にはな、汝達の知らない深い事情

があるのだから、汝は決して犠牲の結婚をするななと思つちや可けないよ。僕があゝ乗氣になつたのは、今から考へると免れ難い然も喜ぶべき運命だつたのだ。新助は屹度有力な商人になる、後から漸次甘味の出る男だ。だから僕の事は些とも案じないで、心置きなく嫁つてくれ。僕も行くよ、一生懸命で。………嫁さんの話はな、僕も悠り考へるが、人には幾らさう思つても能きない範圍があるから、延される事は一日でも延して、暢氣にやつて貰ひたいと言つてくれ！」と涙含んで云つた。

此の時午砲が響いて、方々に氣笛が聞えた。

十の五

絹を張つて、礮水を引く、下繪から墨描きをする。喜久次は是等の順序を経て、

機を逸した展覽會の批評が新聞紙に散見する頃、お春等の姿を畫面に現はした。彼は心身の疲勞に戦ひつつ色彩の研究や背景の描法などに凡ゆる辛酸を嘗めて、辛々亡父の一週忌の日落歎の筆を擱いたのである。書題は前者を「凱旋祝」とし、後者を「慕參」合せて「戦後」と名付けた。

此の時傳太郎が既に結納を持つて上京してゐて、坊が可愛らしいとか、着色が佳いとか、如才なく稱めた。彼に限らず内輪の者には「凱旋祝」より「慕參」の方が評判が好い。お絹は幾乎誇り顔で、

「汝、ほんでもよう是れだけ描けたなア、一心になつたさかえ、綺麗やは。けんどもお父さんが死なはつてからやであかん。」と何度も云つた。

お春は其の前に立つと、ぼつと紅くなるが、例の淋しい表情をした。最後に立掛けて視て、喜久次は何故もツと嬉しくないのか、始めから不安の念に驅られて

ゐたが、未だ港へ着いてゐないのか知らと沁々冷たく感じた。すると又添削した
いやうな點が眼に映つて來たが、兎も角置場がないので、東福田町の知合ひの經
師屋へ托する事にした。車で其れをば運ばせて、彼は戀人に別れるかの如き悲哀
に打たれた。但し永の滞在を謝禮して、縁りの部屋を引上げた時には、流石に肩
が寛んでにっこり微笑まれた。

さて喜久次は殆んど放任してゐたが、お藤の婚禮準備も亦分相應に大事件であ
つた。彼が屏風を揮毫中、お春と二人で縫ひ續けて、仕立屋にも頼んでゐた。海
山遠く、父親はなし、萬事は嫂の實家が親元のやうな計ひで、箱や小物の類は京
都で調べる手筈にして、衣裳は大抵鐵道便で送つた。其の時喜久次は多年粗略に
扱つて來た妹に好い印象を與へるやうな賤別がしたいと思つて、色々考へたが見
當らず、繪絹の反古に腰折を書いて、行李の底へ忍ばせて置いた。實は彼の都合

で半月ばかり延びたので、今宵は媒介人と母親に伴はれて、愈々新生涯へ進み行
く所謂吉日である。それで彼は何くれ奔走してゐたが、是れからうからやからが
心ばかりの祝盃を舉やうとする眞際に、ぶらりと家を出た。

喜久次は懷手で首垂れつゝ、風の冷やかな、塵埃の立つ、夕暮の淋しい雉橋を
渡つた。日は早や沈んで、夕映も黒み、鱗雲も散つて、薄すり靄が棚引いてゐ
る。彼は壕端の枯柳に凭れて見たり、深呼吸をしたり、うろ覚えの詩を口號んだ
りした。勤めから歸る人、馬車を驅る人、荷物を脊負ふ人、散歩する人、其の他
色んな男や女が往來をしてゐる。是等の人々がどんな氣持で歩いてゐるのかは素
より解らず自分の心持を知る人もないと思つたら、彼は唯一人の妹を手放すのが
惜しくて堪らなかつた。九段の坂を登つて、人家の海を見渡した時、其の感じが
一層胸に逼つた。雁の一群が物騒な下界を通ると云つた風に、急いで飛んで行つ

た。喜久次は招魂社の境内を一廻して、澄み渡つた空の星を眺めつゝ、歸宅した。
 『義兄、まアどうしておゐやしたいナ、皆なが夫れは案せてく……』とお春が泣きたさうに云ふ。

聞けば妹と母は餘り待兼ねて甥を連れて、今しがた思ひ出した買物に出掛けたさうである。傳太郎は細い眼をうつとりさして、火鉢を抱へてゐた。喜久次が頭をかきく行くと、坐り直して、

『いやおほきに……、先前から貴方が見えぬので、ボチ／＼始めました。性もない媒介人ぢや、はははは。』

『其れが結構です。非常に失敬しました。』

『まア一つ行きませう。』

『難有う。どうか形式は凡て丸抜きにして下さい、僕が斯ういふ事には間に合は

ぬから。』

『さうごすとも。何かなし氣樂にさして頂いて、こんな嬉しいことはおせん。』とにこ／＼する。

お春は熱いものを持つて上つて來た。心配で堪へぬ面持で、

『どうぞ義兄、今夜の處は味好う祝うてあげておくれやすナ。お膳までちやんと斯う出して、さアと云ふ時になつてからは、妾もどうぞせう知らぬと思ひましたわ。姑御さんやふうさんの身になつておみやす。……』

『そやけんご、お春、喜久さんの身にもなつてみいな。獨身でお父さんの代りをして、大抵の事やない。』

『さうごすけんご、妾がしんどうて……』

『其の位あたりまいやがな。——まア、喜久さん、聴いとくれ。一ばい言はう

と思ふて、つい機がなかつた。全體私はな、今度の此の御縁は最初から氣遣うてたのぞす。貴方が卒業（高等工業を）をして、宅の方へ来ておくれたのなら、そら何やけんど、かうして此方へお出でて、私等には寄付かぬ腹ぢや。でもさうとすやろ。昨年の五月、此處の小父さんが見えた時にも、新助が態々私を河原まで引張つて出て、實はかうくや、よい幸ひ小父さんにうつらい訊いてみてくれといふ幕で、私はあかん、止めときて首振つて、小父さんにも耳打ちせなんだのぞす。けんどもな、新助が頑こない、お藤さんの處女でござる間は厭やて、他からある話しも受付けん。何かなしお母さんやお春を後援にして、えらい手強い無茶を言やがる。そやよつて私も一つ考へた、此奴今まで堅くやつて来て、——』

『もう家兄さん、お止めやはい、そんな事。』とお春が氣を揉んで遮つた。

『まアお聴さいな。私がこんなお話する時であらへん。』と盃で口を濕して復た鏡

舌る。

『そこで喜久さん、有様が斯うや。貴方が今度奮發して、八方丸く納めておくれ
たさかえ、私等の方でも考へてますやて。此の間もな、新助が歸つて来て其の話
し、喜久さんも一生懸命にやつてござるが、あの年齢で嫁さんも娶はんと、加之
に店までして、あれでは體が續くまい、京都へ來やはつたら可いと言ふてるのぞ
す。お絹さんも大賛成ぢや。どうぞす？ 自慢やないが、京都はよろしいぜ。此
頃なら何處へ行つても紅葉や茸狩り、貴方々にはもつて來いや。』

『そら京都は僕も行きたいのです。其のお志も非常に難有いのですがねえ、何
しろあんな妹をさう歓迎されては、後から屹度失望なさらうと思ふ。其れが僕の
心配で、此の間からも……。』

『いえな、そんな氣遣ひが……。』

「どうしてさうぢやありませんよ。何の長所もないのだから、汝もかう云ふ先きで幸棒が出来ぬやうぢや死んじまへ、報はれぬ愛は苦しいが、こんなに望まれて嫁くほど幸福な事はない、ラツかりしていると罰が當るぞと言つてたのです。どうか甘く見せないで、時々うんと意見してやつて下さい。是非共お願ひ申します、僕では始末に了へぬから。」と手を着いて頼んだ。

階下で物音がしたので、お春は話半ばも介意はず降りて行つた。やがて母が出て来て、彼の雲隠れは咎めなかつたが、時間が遅れる、早く衣服を着替へよと、同情を求める眼付で促した。喜久次は未だ七時前だ。静で可いと動かずに居ると、お藤が燈火を目眩さうに上つて来た。彼は其の妹の姿を改まつて見る気分は掛なかつた。

十一の一

「寒くなりましたねネ。愛宕の山には白い物が見えています。私は兄上にお返事を上げたいと思ひつゝ、何かと變つた所用に取紛れて、つい遅れました。お母さんがしばらく逗留なされるので、大層御立腹のやうですが。何もさうお氣になさるに及ばぬぢやありませんか。尤も直ぐ歸京する筈でした。私も一度歸りたかつたのですが、皆さんの御意見で春迄延して、お母さんと三人でお父さんや長兄さんのお慕詣をして、家運を祈つて、而して永源寺の紅葉見に行つたのですよ。一週間程遅かつたので、他の方には興味が薄かつたが、私には霜枯れの山や故郷の清き流れが懐しい涙の出るやうな追想を興へました。彦根へ廻つて、守山へ寄つて、四日目に歸宅、其の間には書きたい事が澤山ありました。」

つまりお母さんはネ、當分體が二つ欲しいのですよ。兄上の方も案ぜられるし、此方も新世帯ゆる私が馴れる迄是非にと言はれや居りたいのです。それに野洲屋の皆さんがさう仰有るから、私は夫れに反對するあたりか、其の御厚意を感謝して居ります。兄上は其の邊に色々神經を惱まして、餘り厄介になつては可かんとおつしやるのでせう。其の思召しは難有いけれど、一昨日も亦其のお手紙だから、私は今日一つ、兄上に忠告します。兄さんに忠告なんか始めてだわネ。

兄上は私が今度此方へ望まれて來た裏面に、どの位嫂さんの意味が含まつてあつたと思つてゐらして、多分お母さんに餘り喧しく言はれて、別問題だとか、運命だとかいつて勧めたのでせう。私は又、餘り兄上に喧しく言はれて、さう思はされたの。だけれどネ、嫂さんの思想は、此の問題で段々變つたのよ。誰かてあの調子では變らずに居れない、侮辱されてるやうなもの。私は其の變化を見て、

色んな事からやう辛と覺悟したのだけれど、嫂ねんの其の苦しい胸中を察するとほんとに涙が滴れるわ。だから兄上が今、お母さんの滞在くらゐを大仰に世話になるのどうのと仰有ると、嫂さんを一層苦しめるばかりです。それこそ私が困つて了ふから、どうぞそんな心配は止して頂戴！ 兄上の縁談さへ調ふたら、嫂さんはお母さんと勝坊と三人で別居するか、夫れとも兄さんが別れるかに定めたりやありませんか。勿論私は兄上の立場にも同情しますよ、嫂さんのあの清い深い愛を眺めてゐるのは辛いでせう。此方の方々の思惑も不安でせう。だけど夫れは私が最初兄上に言つたこと、よもやお忘れであるまいから、矢張り運命だと思つて、どうぞ耐え忍んで頂戴!! 何もさう煩悶なさるに當らないわ。

此の間もネ、野洲屋へ御挨拶に行つたら、小母さんの、色々の物語——私も此の御隠居の言葉は大切だから確り聞いたのよ——丹念した甲斐あつて、よう來

てくれた。お前も春もそらと放れた季子で、可愛さに異りはない。したが喜久さんは何かと心配さうなが、彼の娘は、若し其れを言はれては立つ瀬がないゆゑ、後生やほどに止めてくれと束なす手紙、まア之れ見やと私は幾通をも讀まされて、あの方の今更ながら美しいお心に感服して、しみじみと泣きました。事情は兎も角憎んでゐたのを悔いました。小母さんは、親の情から後家の不愼さに、小舅の言分が常なら、養子でも取つて分家しやうと子にひかされる娘を引き戻して、方方へ罪を作つた。寵愛したお前にまで怒られた。したが、喜久さんはきつい言交しがあると思えるなど、顔の燃えるやうな、濟まないやうな、悲しい嬉しいお話を、私は半日伺ひました。

そりやネ、此方では兄上と嫂さんのお噂が時々出ますよ。だけご非難される點は一つもないので、唯兄上が獨身に被居るから、さう成つたら可からうと皆さん

が望まれるだけです、嫂さんがあれだからネ。でも兄上の頑固は今始まつた事でもなし、宅では兄上に同情してますよ。野洲屋では、變人同士で淋しい事やるとのお噂。それでネ、兄上が嫂さんを眞實の兄弟として、仲善くしてゐらしたら、何處に故障も起らず、私もごんなにか嬉しいわ。だから私のお願ひはネ、兄さんが志す方へ飽迄進んで、理想を實現せられん事を祈ります。而して適當な方と早く結婚なさい。そしたら、大抵の問題は解決させようよ。兄上が秘密にして被居るから、どうも仕方がないので、それは私達でも陰ながら随分心配してゐるのですよ。

其れから結婚生活の感想を話せて仰有るが、私なんかに解るもんですか。唯ネ、盲人を手を引かれて知らぬ處へ連れ行かれるやうに、どこへ行ともどうなるとも知らずに暢氣に朝夕を過し居ります。氣樂なことはほんとに氣樂よ。誰れ一

人氣兼ねはなし、會ふほどのお方も大概以前の知會ひなので、寄ると、前の嘶が出ます。お光ちゃんも度々見えて、私の好い遊び友達、兄上と御室へ行つた話をよくするわ。竹屋町にもお仲間があるし、私は三四年前の時代に復つた心地で、毎日京辨と半々で笑つてます。お母さんは丸でお客に來たやうちや、夫れでは可かんと仰有るけれど、當分は仕方がないので、電話の用一つ達せないンだもの。全く空気が違ふから、もつと高尚な話聞きたいと思ふ事はあるけれど、私はまア幸福だと感謝して、多少は私の職分に就いて眞面目に考へて居ります。未だ一度も苦い顔一つされず、尊敬を強いられた事ありません。商賣に忙しいから、私なかに介意つてる暇はないのでせう。私も平氣よ。だけれども御安心下さい、兄さんに言はれたこと忘れてはゐませんから。

お母さんは昨日から小母さんと木津の里へゐらッしやつた。それで私は二日掛

けで此の手紙を書いたのよ。どうぞ嫂さんによろしく、折角御自愛を祈ります。書外は次使へ、左様なら」

斯の長い手紙は喜久次が再三母の歸京を促したので、漸くお藤から來た返事である。彼は妹等の愉快さうなに引替へて、實に不快な生活をしてゐる。三日目に歸る約束であつた母が逗留するに連れて、段々家に落着かなくなり、毎晩寒いのに何處かへ出掛けた。時には酒氣を帯びて、其れを包み／＼歸つて來る。而して、お春等の寢静まつてから讀書や習作に耽つて、正午迄眠るのが例になつた。お春は其の當座は愛嬌、嘲の一つもしたが、隙を見せない警戒を嚴重にして、嫂の界を一步も出ない。彼がどうしてゐやうと知らぬ振りして、身に餘る辛さ悲しさを凝然怵へ、店番から炊事針仕事などに、相變らず身を委ねてゐる。時には、「何ほ親切を盡さうと思ふても、皆な妾のいたづらからなるさかえ、もういつ

を死んで了ひたい。』とさめく泣いてゐた。

勝坊は喜久次に、

『伯父さん、何で然う怖い顔するやいな。坊は京都へ行きたい。』と屢々云つた。

十一の二

喜久次は、私は兄さんのためよと言つて嫌ふ妹を、偽善だとか淺慕な根性だとか、頭こなしに叱付けた記憶を新にして、お藤の手紙の前に聊か赤面した。自分はどうも思慮が足らぬ爲め、感情に逸る爲め、経験が乏しい爲め、敢て妹の結婚問題に限らず何事も最初軽卒に飛出して、中途から其の後始末に非常に悩むと思ふ。而して肩に去られ父に逝かれて、信賴すべき相談柱のない境遇を悲しんだ。何は兎もあれ父さへゐたら、妹の處置は素より、嫂の問題も全然解決されてあつ

たのに、彼は父の死後五六年も経つたと思ふほど様々の辛酸を嘗めた。

お藤の方は假に先づ可いとして、惱まされるのはお春の身の上である。彼女は嫂とは云へ一旦復籍した女で、夫れが爲め喜久次等はどうなにか打撃を受けたかも知れぬ。野洲屋と仲の善かつた權七も、小母等の解らない要求には憤慨して、色んな悲劇を演じたのであつた。けれど強いて勝坊を養育したので交通が斷絶せず、お絹の嫁最負と合致して、又もや深い關係がお藤の結婚で復活した。彼も其れを慮かつて、随分母と諍つたもので、お春を再び嫂さんと呼ぶ意志は更になかつた。けれども家族の氣性を呑込んである彼女は、以前の調子で姑御さんとか義兄さんと言つて、來た日から宅の者のやうになつて了つた。喜久次もつい嫂さんくんと、賑かになつたのを喜んだ。而して二三年後にといふ彼の意見は、來年厄年だとかに葬られて、直ぐさま支度に取懸かられた。見物に來たお春は、其

の儘する／＼と滞在するやうになつた。

其の代り彼女は結婚準備其の他に半日の暇もない程忠實に働いた。喜久次の書室へも幾度通つたかも知れぬ。で、喜久次は別問題の混同を恐れて、再婚を勧めても見たが、肯はぬとて、勝之助を置いて歸れと云ふ氣になれなかつた。何分戀に悩み、寂漠に打たれ、重荷に疲れてゐるので、其の親愛を受けずに居れなかつた。家での重寶さも考へて、彼は若しあの時亡父の面影に遮られず、處女魂に拘泥せずに置いたら、あゝもなからう、かうもあらう、母も嫂も自分も……と、眞から彼女を愛する氣の起らぬ自分を嘆く時すらあつた。けれど其れは愚痴なので、母の心からにもせよ、お春が嫂の殻に隠れて別居するやうになつては大に彼は苦惱せざるを得ない。但し其れは、淋しい老母や若後家や、甥の爲めに一面望ましい事には相違ないが、唯つた一人の妹を早さと連つて行つて、二人を置いて

き放りにして、いつかな歸らぬ母の所存などを考へると、喜久次はもうどうする事も出来なかつた。延せることは一日でも延して、自分は自分で行くの外なかつた。

喜久次が青春の血氣に駆られて、美代子を挑み、島夫人に接近して、後には迎ふる戀をも棄てて、鶴子を得んとし、徹頭峻拒されて、種々の激情に悶えた事は茲に言ふ迄もない。其の是非判断は別として、如何なる障害をも打克つて宿意を遂げ、慚なくとも愛の反動より追れんとした彼の努力は非常なものである。で、彼は今でも其の心を惜んで島の母子を忘れてゐない。妹に別れた冬枯れの淋しさ、讀書に疲れた頭腦が京都へ飛ぶと、其處に色んな想像が湧いて、筆舌に現はし難い情念が起つた。満たされぬ欲があつた。止むに止まれぬ心的活動があつた。夫等を彼は勉學に轉じて、大に成功し、格堂先生に鶴子を周旋して貰はうと、過去

の雑念を抑へつゝ考へる。其の癖彼は鶴子が其の切望に副ふか、幾ら望んでも結局絶望か、偶に行會ふと一寸顔を紅める位なので、些とも知らないのだ。けれど人生の希望は大抵そんなものだと思ふ。例へば、大政治家とは衆人の的だが、位人臣の極をきはめた元老方にすら大不平があると云ふ。實にや望みを得れば望みなし、満たされぬ希望があればこそ生きて居るので、其のボンビリチーのある間は何處までも望んで行く。丁度新助がお藤の處女である間はと望んでゐて、到頭引張つて行つたやうに、自分も鶴子の處女の間はと思つて、克己修養を怠らなかつた。

偉人の跡を慕ふたり今後の製作に思索したりして、喜久次は母の不在をさう氣にせぬやうになつた。時には出鱈目の申談を言つて、お春を笑はした。勝坊を活動寫眞へなど連れて行つて、何かと可愛がつた。多くは彼の杞憂なので、心の持

様一つで案外平和な日が続いた。

或る夜半のこと、彼が讀書に親んでゐると、方々に三ツ半鐘が聞えた。喜久次は何時もやうに雨戸を繰つて覗いたが、西の幽に明るのは月の落ちたのか、星が空一面に針の尖を撒散らしたやうに煌いて、何方も近所は街燈の殘光がぼつとしてあるばかり。それでもチリン／＼消し馬車は行く。北風は胴顛へのするほど激しく吹き荒んでゐる。今夜邊り焼けちや堪らぬと思つてゐると、火事は福田町でござい」ドン／＼と太鼓を敲いて來た。彼は冷ツと驚いて、一寸駈付けたい氣のするのを打消しつゝ、洋燈を持つて階下へ降りた。

お春の枕元へ來て見ると、彼女は左の腕を勝之助の首筋へ入れて、目立つやうになつた眉根を蹙めて、いとと淋しげに眠つてゐる。あの色艶の佳かつた頬が斯うも塞れたかと痛く感じて、

「嫂さん！」と彼は呼んだ。

するとお春は恟として眼を開いた。

「あのねえ、一寸頼みたい事がある。」

「へーエ！」と彼が止めるのにむく／＼と起立つた。其の拍子に膝頭の白い處がチラと見えた。

「今、福田明が火事だと云つてたから、明日の朝、捨公に見にやつてくれませんか。」

「あのまア、福田明が………!？」

「だから念の爲めにねえ、併しそんなに泡くるに及びませんよ。」

「いゝえナ、只つた今妾、妙な……。一寸是れから一走り……。』と傍の帯を締めかける。

「何を云ふやら、女の癖に。行く位なら僕が行くよ。——まアお寝みなさい。風を引く。」と止めて置いて、彼も二階の臥床に就いた。

十一の三

翌る朝喜久次が未だ寝てゐると、小僧が枕元で、

「旦那、彼の邊は皆焼けてます。」と暢氣に云ふ。

「ぢやア屏風はござなつたんか。」

「其れは質きませんでした。」

「さう云ふ間拔けた、汝は。」

「でも何處に居るだか解りませんもの。」

「ふん、夫ぢや可い。」と云つて、彼は復た蒲團を被つた。

今更どの道仕方がないと思つて、喜久次はもう一寝入りしたかつたが、矢張り氣に懸るので、そこくに顔を洗つて家を出た。福田町へ来て見ると、未が方に煙が立昇つて、泥濘んだ街道はどやどや混雑してある。焼け焦げた蒲團や葛籠が軒下に置いてあり、びしょ濡れの女が簞笥の抽出に腰掛けてゐた。取敢へず彼は經師屋の安否を見舞つたが、板圍してゐた職人が、立退場は皆川町○番地だと教へてくれた。喜久次は此の慘憺たる光景を他所にして、動悸を高めつゝ皆川町へ廻つた。漸々番地を探し當て、薪屋と八百屋の間の路次を辿つて行くと、夫れらしい裏店が直ぐ眼に着いた。併し何分狭い長屋の取込みなので、足を踏込む場所もない。職人體の男が四五人、握飯で茶碗酒を飲んでゐた。經師屋の堤が辛と出て来て、鉢巻きのまゝ上框に額づいて、

『小池さん、全くどうも申譯がありません。私は切腹せにやならぬ位です。』と只

管謝辭を云ふ。

『大變でしたねえ、僕のも焼けましたか。』と格子戸を隔て、問ふた。

『さうなんですよ、兩方共……。ごうも早や何とも……、家内が火傷をしたもんですから、それに皆な懸つちやつて、品物はからきし出せなかつたのです。旦那様方の御秘藏をお預り申して置いて、私は全く顔向けが出来ません。』

『でも災難は仕方がないさ。内儀さんはそんなにお悪いのかねえ。』

『はア、難有うございます。今しがた樂山堂病院へ昇込んだのですが、ごうもはや……。』と云ひさして、彼は握拳で眼を拭ふた。

喜久次は當面堤を氣の毒がつて、間もなく彼は別れた。經師屋の家内といふのは、初中終海酸漿を銜んでゐる饒舌家で、彼が仕事の催促に行くこ、毎も亭主を差措いて、色んな世間話をした。つい此の間も荒牧が書畫で詐偽を働いた物語を

始めて、近頃頭牢死をしたさうだが、天罰は恐ろしいものだ。と獨りで點頭いてゐた。其の彼女が今度家財を失ひ、世人に多大の損傷を蒙らせて、剩さへ病院へ行くやうな怪我をしたのは、どう云ふ天罰なのだらう？ 自分も亦他の因果で、こんな祝融に罹つたのか、今四五日の處だつた。早く仕てくれや可いものをと、そろ／＼彼は底知れぬ悲境に陥つた。

噫、多日心血を注いだ屏風は空しく烏有に歸した。一年近くの辛勞は敢なく晝餅に歸した。徒勞に歸したと、喜久次は背骨を引抜かれたやうな思ひでぶらく／＼神田橋へ出た。弱い太陽は風に吹かれて、寒い光線を投げてゐる。電車や人馬の往來の激しい橋の際に、彼は茫然佇んだ。煉瓦など積んだ小船が濁つた潮を遡つて行く。只ある荷船の舷で、男まがひの女が仿なく小便をした。彼は此の漫畫から一種の暗示を得て、薄雲の動く空を仰いだ。

喜久次は他出中の柴崎を其の社に訪ふて、うんざり家に歸つた。お春は勝坊を連れて、何處へとも言はずに出て行つたとして、小僧が一人ぼんやり店をしておいた。彼は草稿を披けて、苦心の跡を多時眺めてゐたが、誰かにグイと引上げて貰はねば堪らない。其の力のありさうな處は矢張り格堂先生である。彼は意氣銷沈して、小石川へ出掛けて、肩身を窄めて先生に面會を乞ふた。すると今忙しいが一寸ならと云つて、書生が應接室へ導いた。喜久次は放蕩息子が親里へ歸つたやうな心地になつて、悄悄と最近の變を先生に語つた。格堂も流石に同情に耐えぬ面持で、

『そりや酷い目に遭つたな。併し人間はねえ、二度や三度の蹉跌で挫折しちや可くない。得難い刺激だと思ひたまへ。』と勵まされた。

其處へ薫が茶を持って来て、會心の笑を洩して行つた。

「何しろ君は、根張強い男だから、例の調子で書直したら可からう。」

「はア、残つてある必要がなかつたのかも知れませんが、愚作ですから。」

「さうか、夫れも一つの見方だらう。——だが、何時か悠り来ないか。」と腰を浮かした。

間もなく喜久次は、蒼い顔で先生の門を出た。こんな場合に即座に出る挨拶位で、此の悲痛が癒やされやうと思つたのが間違ひだ。知合ひを使つて、同情の袖乞ひに行つた處で格別はあるまい。自分が求られてもさうだ。京都へ沙汰したら母や妹等は嘸ぞ悲しむであらうが、其れも自分を生かす力はない。あれを世に出したらと思つてゐたにと滅入り込みつゝ、彼は夕暮の淋しい寒い町を歩いた。只ある教會の前に来ると、提灯が吊されて、聯合大説教會の立札が出てある。彼はふと入つて見る氣になつた。

電燈は點いてあるが、聴衆は未だ一人も集つてゐない。腰の曲つた老人がストーブを焚付けてゐる。底髪の厭に突出たオールドミスやうな婦人がオルガンを掃除してゐる。何れも瘦こけた青年が三人掛りで、講壇の横の壁へ椅子を凳にして演題を貼つてゐる。喜久次は後の方へしよんぼり腰掛けて、一枚々々貼つて行くピラを見てゐた。「基督者の使命」とか「人生の歸趣」とか「敵を愛せよ」とか素晴らしいのが出る。四五人目に三崎町教會の志賀牧師の「吾人の主張」といふのが掲げられた。彼は知人だけにどんな主張だか聴きたかつた。最後のは「イエスの母」と云ふので、之れは多少著書もある或る有名な牧師のであつた。彼が何かと思はされてゐると、ピラを貼つてゐた男が一人近寄つて来て、

「貴方は道を求めて被居るのですか、聖書を読みましたか。」と狎々しく云ふ。

「はア、多少は読みました。」

『では洗禮をお受けになりましたか。——夫れでは早くお受けなさい。イエス様は屹度貴方を愛してゐらっしゃるのです。疲れたる者よ、吾に來たれつて、絶えず招いて被居います。』と變挺な手付をする。

喜久次は日頃クリスチャンに懐いてゐる感想が湧いたので、今は説教が始まるといふのを後にして、ぼつ／＼入つて來る人々と入れ違ひに外へ出た。

十日餘りの月は牙を切つて屋根瓦の霜と煌き、裸木の枝が宛然美妙な繪に成つてゐる。彼は其の造化の名畫を踏んで、臺町の見晴らしの高臺へ芝生の露に濡れつつ來て、樺の大木の根元へ腰を卸した。未だ初夜ではあるが、白味を帯びた月光は、紛々たる世上の一切を美化してゐる。點々と燈火の隠現く夜の市街も亦、電車の動く處を除けば得ならぬ美觀である。喜久次は悲哀に沈んだ自分の遣り場を遂ひ詰めて考へた。美は實に結構である。葉末の露に一滴に評價し難い美を認

める、寔に天與の幸福である。けれど自分は美術家を以て立たんとして居りながらも未だく、俗物だから、是れ丈けでは満足が出来ない。基督教！是れ亦實に結構である。泰西の文華を作つた寔に偉大な宗教である。基督教の至高至善な事、信仰の必須な事、教理も多少は知つてゐる。説教の標題を見た丈けでも何物かに觸れる。けれども基督を眼前の實在者の如く輕々しく語つて、ヤレ救はれよの、淨められよの、愛せよのと強いられても、自分がさういふ尊い福音に浴してゐる信者から受けた印象は、悪い方が大部分である。無論善い人もあらうが、其れは未信者にもある。中途から止めて了つて、彼等の所謂罪人よりも更に悪くなる人が幾らもある。つまり宗教的生命は其の人に在るのだ。其の場合にも依るのだ。美的觀念と同じ様に、其の對象や程度は各々違ふ。神や月やに異りは無いけれど、十人十色で、人によりけり時によりけりだ。何が何でも自分は今、愛されたいと

望んだ人から愛されたい。夫れさへ能さたら、屏風の一隻や二隻焼たつて些とも介意はない。屏風に限らず何がどうなるか一瞬間前まで解らぬ世の中だと、彼は寒さに顫へて立上つた。星が一つ、隕ちて了ふかと危ぶまれる程飛んで消えた。

十一の四

喜久次は色んな理屈も考へたが、結局鳥夫人に手紙を出すの外なかつた。一つとして確な事はない徑路ではあるけれど、彼は夫れが爲め非常な犠牲を拂つたと信じてゐる。あんなに試意を籠めて、反動を忍んだのに、其れが全然無意味に終るやうなら人生は絶望だといふ觀念が胸奥を放れない。多日憧憬した夫人から、此の際一擲同情の涙が濺いで欲しかつた。鶴子の顔も見たかつた。勿論敵のやうに憎んだ時もあり、種々の悪感情も漲らしたが、人は相手次第で變動する。外界

の刺激に超越して居れない。自分自身でも變動して、昨日の自分は今日の自分ではない。然も何處迄も自分は自分である。何は兎もあれ喜久次は先づ今回の災厄を述べて、抑も彼が最初鳥邸を訪ふた當時の精神状態から、此の間展覽會場で對談した時の感想まで、一年有半の記憶を辿つて縷々と謙遜に書き列ねた。而して最後に「右様の次第に御座候へば、何卒小生の微意御諒察あつて、小生の不行届より牛じたる幾多の障壁を御取去り下され候は、小生の欣喜斯れに過ぎず、習作の焼失位は敢て悲しむに足らざる者に御座候、早々頓首」と擲筆した。

是れに對する返辭が又翌る日の朝、計らずも一面識ない島輝彦から着いた。喜久次は吃驚した。「突然ながら小妻へ宛てられたる貴書は不得要領に付、主意明晰なる一書を明日中に折返し御送附相成度候」と粗忽に書いて置く。

併し二伸として「曾て拙者も探幽の軸を經師屋に於て盜難に罹り、甚だ閉口し

たる實驗があるが、夫れと是れとは事違ひ、貴殿の衷情も察し申す。なれども須らく男子は過去を放擲して、益々切磋琢磨の程偏に嚮望に堪えず候」と記されてあつた。

何しろ島からの反響は彼の切望する處なので、喜久次は此の追啓にすら一徹の光明を認めざるを得なかつた。明日中と云へば今日中だから、さう早急では困るが、兎も角稲垣か柴崎に相談しやうと考へて、芝の奥まで朔風に追はれて行つた。けれど稲垣は不在であつた。で、彼は柴崎の社へ寄つて、時々行く地下の談話室で、手紙の主に氣を措きながら其の一通を見せた。

柴崎は一應讀んで、相手の動止を見ながら、

『君は飽迄やる氣なんだねえ、どうも執念深い男だッて。』

『つまり逃げ場を失つたんさ。親父が生きてゐたら、何とか美味くやつたんだが、

僕はメチャクに成ツちやつた。笑つてくれたまふな。自分の眞心が惜しいんだ。』と顔を紅めて云ふ。

『無論僕は、君は君として同情してるさ。一向同窓とも往來せぬやうだし、色々苦痛があるだらう。昨夜も君の不在に行つて見たら、お春さんが涙を零して頼んでたよ、君の思つてる女を世話してやつてくれッて。何しろまア、行くとか返事を出すとかしたまへ。』

『まさか怒つてもゐないねえ。』

『そりや今日となつちや怒れもせぬさ。満更君が無茶を言つてるンぢやあるまいし。』

『さうとも、僕は些とも不條理な要求はしなッ。』

『そんなら無教育な人ぢやないから、何とかするだらう。だから君は所信を遂行

したまへ、僕も考へて置かう。」と聲援した。

喜久次はもつと色々話して、助力して貰ひたかつたが、柴崎に所用が出来たので其の儘別れた。而して彼は今更の如く鶴子の爲人や境遇の懸隔に就いて躊躇したが、凡てを運命に任して、行ける處まで行かう、所詮行けなければ死んで了へば可いと覺悟した。考へ／＼案ぜ／＼亢奮した頭腦で、明晰に言はねばならぬと思つて、若し自分が數年間に貴家と縁組の出来る丈け發達したら、御令嬢を頂きたいといふ返書を認めた。而して従來は様々の事項から情操が亂れたが、幸ひに知遇を得て純潔な青年に復りたい。お春といふ嫂と目下は同居してゐるが、これは云々の女で、毛頭特殊の關係は神明に誓つてない。夫れが爲の斯れ／＼だと、言はずもがなの事まで綿密に書添へて置いた。

其の後喜久次は何かと希望を懷き初めて、火災の打撃を紛らされた。其の如何

にも甘さに呆れて、催促に往つて／＼行き抜いた貸金が取れさうになつたので、喜んでゐるやうなものだと考へた。何しろ切實に物質を思はされるやうになつて商賣にも身を入れた。表を通る人々を眺めては、早く筆端から黄金が迸らねばならぬと利氣んだ。お春はといふと、あの屏風が焼てからは殆んど口も利かないで、何か知らし心願を籠めてゐる様子である。喜久次はそんな事に頓着せず、全然忘れてゐたに、横合ひから飛込まれて、情緒を混亂されて了つた。厄介な女だと彼女を腦裡から去らすべく努めた。併し多大の恩義があるので、母と安穩に別居さしたら可い、夫れにしても金だと、些とも頼み手はないのに、一生懸命に鉛筆を握つてもゐた。

或る日の黄昏時、彼が店にゐると、珍しく格堂がにこ／＼やつて來た。「どうぞお上り」と荐りに請じたが、先生は電車の乗換切符を見せながら、經師屋に交渉

したかとか、商ひの景氣はどうかとか、何時にない愛嬌たつぷりで饒舌つて、
 『明後日忘年会は畫學校でやるから、遊びに来たまへ。』と云ひつゝ急々行つて了
 つた。

忘年会は、昨年迄は先生の私宅へ大勢が集つて、高弟連の奥様達の給仕で何か
 一寸饗應されて、落語か薩摩琵琶位の餘興がある例であつた。其の時門弟は鏡餅
 を持つて行つたが、今年からはそんな舊例は廢するさうだ。當日喜久次は隣の下
 駄屋に俄に葬式があつたので、青山まで行つて夕方晩く歸つた。それでも島に期
 待のある以上は先生等に疎まれては困る、實は先生に頼まねばならぬのだから、
 此の間の御機嫌が無意味であれば可いと思ひつゝ、外套を引被つて登校した。
 雪がチラ／＼と降つてゐた。時間が餘りに過かつたので、生徒は大方歸つた後で
 あつたが、席畫を張つた日本畫科の教室で、教師連が酒を飲んでゐた。喜久次が

遅刻の挨拶をすると、格堂先生は、

『あゝ、待つてた。此方へ来い。』と怫然として彼を職員室へ引立て行く。刈屋と
 共に椅子に掛けて、

『君は何てふ痴漢だ。馬鹿野郎！』と血走つた眼付で怒鳴つた。

『何故ですか。』と喜久次は只々呆氣に取られてゐる。

『もう島へ手紙は遣らぬと云つたぢやないか。』

『はア、申しました。』

『ぢやア何故結婚を申込んだ？ 昨夜小林が使者に来よつて、予は吃驚したんだ。
 コラツ！』

是れで様子は解つたが、喜久次は殆んど度膽を振かれた。ぼつと氣が遠くなつ
 て、夢で魔されたやうな心地がする。

「彼件はもう済んだンぢやないか、君！ え、情けないことをしてくれた。」と
刈屋が側から云ふ。

「實に見下け果てた偽善者だ。色情狂だ。あんなに島を怒らしちや困る、君の
やうな男は處分するぞ。」

「どうぞ願ひます。」と捨鉢になつて、彼は满面朱を濺いだ格堂の顔を見た。

「ぢやア島へ謝罪に行くか。」

「行きます。」

「ぢやア詫状を書くか。」

「書きます。いえ……。」と首を振つた。

其處へ稻垣が人つて来て、

「先生、そりや餘りです。一寸まア此處へいらッしやい。」と袖を引張つた。

「刈屋君、早く書かして、君、持つて行けよ。」と格堂は命じつゝ、稻垣に連れられ
去つた。

刈屋は半紙と硯箱を取出して、

「脅迫されたと思つちや可けないよ。僕も弱つたんだ。」と苦しさに云ふ。

「どうでも可いでせう。何と書くンですか。」

「さうさな。」と顔を背向けて、「今般貴殿に御申込み候儀は全く小生の料簡違ひ
に御座候間、何卒御容赦下され度候」と謝罪状の文句を授けた。

喜久次は頗る冷靜に構へてゐた。こんな理由は微塵もないが、目的を達する爲
めの方便だ。暫く忍べと全然他動的に書き了つた。すると刈屋は其れをポケット
トに收めて、

「君、甚だ失敬だが、當分僕とも猶豫してくれたまへ。」と口を歪めて囁く。

彼は快よく絶交を承諾した。此の呪はれた事件に就いては何かと遺恨さへあるが、曾て受けた恩義を無視したくはない。それに格堂の前には人格のない人だと思ふと、憤る邊りではなかつた。やがて刈屋が影細く去つたので、喜久次は今では迄と観念して。筆序に退校届を書いてゐた。すると刈屋の細君が眞蒼な顔付で現はれて、

「貴方はまア、何故あゝ鳥さんをお苛めなさるのですか。」と突如に詰る。

「永々お世話になりましたが、遺憾なことです。」と彼は他を云つた。

「もうほんとに貴方は、私達を十字架にお梃けなさる。」と涙含んで卓子に俯向いた。

「其れは殺された者が梃けられたンぢやないんですか、耶蘇の倫理は格別ですねえ。」と云ひつゝ、退校届を視箱で抑へた。

「貴方はこんな方とは思ひませんかつた。善い一面があるのだけれど、突飛な事はかりなさるから、私はもう口惜しいッ！」

「他人に善い一面がないから、是非がないのです、殿り倒されて、墓場へ手の届いた男を、どうか突飛位で誹謗だけは止めて下さい。——左様なら!!」と喜久次は流石に涙に咽びつゝ、書學校に永の辭去を告げた。

一度名残に振返つたら、電燈の光がさつと窓から槇の樹に流れて、其處へひらひら降る雪が灰色に見えてあつた。

十一の六

喜久次が悲憤交々歸宅したら、机の上に柴崎の言付が載せてあつた。密封してあるので、顔へて披いて見ると、

『今夜君が又不在には閉口した。多時待つてゐたが、何れ悠り話さう。君には何とも早や同情に堪えぬが、彼の結婚問題は是非断念してくれたまへ。彼等は君を全然誤解して居る。少しも了解して居らぬ。殊に傲慢無禮だから、利己一點張りで話にならぬ。僕は今日小林さんに召喚されて、君との交際を詰問された。流石の僕も大に癪に觸つたから、多少君の爲めに辯護したが、あんな冷血な人物は仕方がない。何も災難だと諦めて、過去は一切葬つてくれたまへ。』

もう決して幻影を追ふては可けないよ。僕等は疾くに破壊されて了つたのだ。實は此の間お春さんが突然見えて、近頃君の舉動が變なので心配でならぬ。どうか様子を聽してくれと云ふ事情で、君の過去やら日常生活の模様も聞いたが、之れは全然君に秘密に頼むといふのだつた。如何にも窮屈な、併し一面大に同情に値する話しさ。君の家は長兄の戦死で、根底から動搖したのだね。それでなくと

も僕は多少君から聞いてゐたし、性格も程ぼ解してゐるから、最初紹介した關係もあるし、陰ながら盡力してゐたのだよ。けれども君の遣方は彼等に了解されない。性格が合はぬのだ。それに奥様は夫れ程でもないが、矢張り斯うなると先生等に自分の勝手の悪い事は云はないから、大將も小林さんも君を色魔のやうに思つてるのだ。何しろ最初の出立が可くないのと其の後の遣口も亦誤解を招く。此の間の申込みでもあゝ直截に書いては、眞面目な話だとは思はぬのだ。僕もあれを見せつけられて、全く一句も出なかつた。勿論僕が同等の地位なら、君は斯う云ふ男だと辯護するのだが仕方がない。もう社を罷めやうかと思つた位だよ、癪に觸つたから。兎も角これで心機一變したまへ。火事に遭つた上には是れちや可哀想だけれど、僕の流義で浮世二分五厘にやりたまへ、淨瑠璃でも語らうよ。誰でも學生時代と同じ思想を持つてゐる奴はありやしない。殊に君なんかはもう疾くに

通越してゐる筈の男だ。美術家なら美術家らしい耽溺でもしたまへ。何も其の道へは何時でも行けるから、敢て勸めはせぬが、そんな事で藝術が解せるかい。頭腦の固い男だ。——お春さんにも一寸話して置いた。何れまた……。」と後の方は思はず知らず書いたといふ風に、鉛筆で走り書きがしてあつた。

是れを読む迄喜久次は、まさか島が他人を愚弄して置いて、揚句の果に詭状を取るやうな人非人とは思はなかつた。刈屋は別問題として、横暴極る格堂には飽迄枯杭して、生命に懸けても鶴子を娶つて見せる。他人に自己同一を追求する位なら、彼れ自らも守れ。奇禍を蒙つた際、其れを通知したのが何故悪い？ さう云ふ自身も彼女を執持つと云つたぢやないかと、死力か出してゐた。雖然、今や善事休した！

夫れにしても小林とは何だ？ 副支配人と重役、親戚の間柄とは聞くが、自分

には全然無關係の男だ。其の局外者が他人の内事に立入つて、格堂へ使者に行くの、同窓の友との交際を詰問するの、誤解するのと云ふ資格があるもんか。貴様等風情に自分が解つて堪るものか、須らか決闘を申込むとすら、彼は激昂を強いられた。

けれども柴崎の忠告も無理はないし、全然世の中から見棄てられたやうな無限の悲哀が滲みて来て、喜久次はもう他人の残忍冷酷に憤慨する氣力も張合ひもなくなつた。破れに破れて行く自分を眺める餘裕がなくなつた。もう何と利氣んでも斯の負傷は癒えない。誰か密と首を切つてくれないかとさへ思つた。ベツたり疊に喰ひ付いて、生の認識が消滅さるべく冀ふた。口惜し涙がはらく零れる、幾ら手の甲で拭いても熱いのが止まらぬ。多時凝然眼を閉つてゐると、亡父の儼が心頭へ映つた。色んな恩愛が思ひ出された。幼少の頃よく父の肩馬に

乗つて方々へ行つたが、親父が確り掴んでゐよと云つて、吹殻を手平へ拂いて煙管を銜へた様など最も遠い故に記憶が浮んだ。而して長兄が出征する時停俣場で、「喜久、頼むぞ、俺に代つて」と涙を隠して言つた最後の言葉と、其の面影とを泌々と回想した。亡父と亡兄が代るく、「伊を悲しむやい。氣の小さい事考へるな、失望せな」と勵ましてゐるかのやうに感じに、「何で斯う我家は不幸やらう………是れでは耐らん、………兄貴！ 戦争は悲惨やなア。………お父さんにも苦勞さした。お春も………」とこんなな國訛で幾度か獨言ちた。どれ程悲觀しても、骨肉の恩愛だけは疑へなかつた。天道に背いた事は爲てゐまいと探つて見ると、ごうかして生きて行きたい氣分が何處からか出て來た。けれども矢張り體中から悲思が湧いて、涙が止まらない。頭が昂らない。動ともすると、鳥等の憎さが意識に上つた。

先刻から勝坊が段梯子の口まで母親に送られて、一通の手紙を持つて再三喜久次に近寄つたが、彼の打伏した動止に退避して、

「お母さん、坊はかなん！ どうせう？」と泣きたさうにお春へ絶りに來る。

「あのナ、ふうさんから來たのやさかえ、早う讀んでおくれやすて、大かい聲でお言ひや、なア！」と押しやる。

勝之助は詮方なしにおろく、

「伯父さん、ふうさんの手紙や！」と勢一杯で云つて、彼の肩先へ置いた。

喜久次は胸ツとして、濡れた顔を擡げた。すると此方で眼を据ゑてゐたお春は、二三段降りて隠れた。

「もう晚いだらう、何時來たのか。」と彼は妹の重さうな封書を見た。

「うん、先前………。お母さんが早う讀んで欲しいッて！」

「あ、直き讀むが、汝はもう寝よ。——伯父さんが馬鹿やで、汝も困つたやら。」

「伯父さん、もう泣かんすなや。坊も泣かんさかえ。」

「汝は中々賢いこと知つてるな。もう泣くもンか！ 善い子だから、今夜はもう寝ろよ！」と云ひく封を切つた。

「お母さんが然う言はつたで……。」と振り返りつゝ、勝坊は降りて行つた。

喜久次はお藤の手紙を見かけると起上つて、洋燈を掻立て、机の前で長坐つて讀んだ。先づ今回の火災をお春から聞いて吃驚した事、一同が同情の意を表してゐる事、こんなこと迄秘密にしてゐる兄の心根が怨めしい事、其れから母が、支度の調ひ次第分明晩の夜行で歸京するとの事、私も歳末でさへなければ一緒に歸りたいが、來春までは是非がない故此の手紙を忙しい中で、一生懸命で書いた

との事、時節柄他に同伴者もないゆゑ、若し延期の電報を打たなかつたら、明後〇〇日午前に新橋へ出迎ひを頼むといふ事、而して彼の焼けた屏風は何れ此方へ譲受ける積であつたから、此方の物が焼けたも同前、特別で幾何に譲つて貰ひたいと新助が母に代價を托したとの事、あの火事のあつた時、お春は、喜久次が火傷をした夢を見てゐたとかで、どうか此の禍ひが幸ひになるやう心願を籠めてゐる、私にも祈つておくれとの殊勝な頼み、素より祈らずに居れやうかとの事なご、嬉し涙を誘はれる長い手紙だが、次第に驚くべき文字が展けて來た。何でも喜久次の昨今の動靜を知つた野洲屋の小母が、近頃腎臟病の宿痾が再發して、氣分が勝れず、お春の可愛さから喜久次の片意地を極端に攻撃してゐる。固々同感の母は口を揃へて、今度の災難位は當然ぢや、天罰ぢや、人情に背いて仕合の善からう筈はないと以ての外の取沙汰、餘りに口惜しいが、まあ聽いて下さいと、

お藤は感慨に満ちて書いて置く。何時ものとは打つて變つた調子で、妹の手紙とは思へぬ位である。喜久次は片手で躍る胸を抑へて、眼を小擽りつゝ、讀んで行く。

「……………兄貴に濟まぬと言ふて、肯かぬ小舅に非難の打ち様がないさかえ、是迄辛捧して來たものゝ、根が遣りたくて遣たのではなく、嫁きたくて嫁つたのではない。餘りの執心にほだされて、人情を盡したので、子の氣持は親には直ぐ知れる。其の時から小舅に眼が着いてあるとは見て取つた。つまり相性なのや。人間の性分の合ふ合はぬは、親子、同胞、夫婦の仲にもあつて、合はぬ者と合はしてゐるは辛い、合ふ者とは合はすまいと思ふても合ふ。好いた人に叱られるのは、氣に喰はぬ人に可愛がられるより尙ほ嬉しい。お春は小舅の言ふ事なら何でも嬉しかつたのや。色戀も知らずに唯連れて行かれた娘に、さのみ無理ではある

まい。夫れ故間違ひが起らにや可いかと案じてゐたが、何事もなかつたのは喜久さんの堅固な處、稱むべきはごこまでも稱める。けれども夫が從軍する時、御國に爲めに一命は捧げる、後に残つたら、弟を俺と思ふて、身に染つた子を育て、くれ、其れが俺への貞節ぢやと、現に此の母の前でも吳々言はつた。彼の娘とても愛しがられた夫を見限る程不實者ぢやないけれど、其の義理立てゝ家が潰れては何にもならぬやないか。妾は後家で置くのなら戻してくれと、態々四五度も呼びに行つて、土に喰着いてもといふ娘を辛々孫を預る事にして連れて戻つた。其れをお前達は妾が無理いふと悪者にしたが、大きな間違ひ、あの者の解つた鼻さんでさへ妾を憎まはつた。けんども其方にしても、廿歳前後の若後家があつては邪魔にならうし、お春もあの氣では辛捧がなるまいと双方を兼ねた親の計ひ。其れをしやにむに東京へ行つて、去年書畫の手違ひのあつた時も夫れ見たかと思

ふた。權七さんの最後まで、年寄りを變つた土地へ連れて行つた息子等の所爲ぢやと思ふてゐる。それでも一旦縁付けた家の繁昌は思はいでか、色々の噂を聞くにつけ、喜久さんはあゝ、お前は幸ひかうと家内中が心配してゐるに、何を言ふても皆なお春のいたづらからにして下すと、斯う氣丈な小母さんは直接間接に仰有るのです。決してこんな露骨ではありませんけれど、私の胸へはさういふ風に強く響くのですよ。私は幾度も泣かされましたが、お人善しの小父さんを助けて大きな店を切廻してゐられた小母さんの、練りに練れた實驗から出るお言葉は、流石に私は今更のやうに感服せにやならぬ事が多いのです。兎も角私は今迄何にも知らないでゐたと思つてます。どうぞ兄さんも、篤と考へて頂戴、是非々々一生のお願ひだから。

お母さんにも子、貴女とは同腹ぢやが、何でさう息子に氣儘を言はして置く。

娘を袖にするので不服をいふやうに取られては心外ぢやが、妾も斯の年齢に斯の病氣、近頃はめつきり弱つた。もう長くはあるまいさかえ、一期の思ひ出に言ふて了ふ。之れはお春が言ふてくれなと後生懸けての頼みやけんども、其の心根を思へば尙ほいぢらしい！ 冥路の障りぢやと仰有つたさうです。お知せしはしないのでゐますけれど、十日程前から不圖した事から餘程お悪いのですよ。併し御心配には及びません。何分兄さんが對向ひでゐてさへ打解けなさらぬのでせう。もう情々小母さんは、兄上に愛想が盡きたのでせう。絶望したのでせう。お母さんは、其れを思へばこそ是迄嫁の肩ばかり持つて來た。これだけ是れで苦勞したのとかと泣いて、兄さんを怨んで居られます。噫、悲しい！

けれど、私には兄さんに今迄解らずに持つて來た同情を、今更棄てたくはありませんよ、兄上が情と戰つてゐられた心持を察して下さすから。一面から見れば

ば、立派な行爲なので。何も彼も運命なのでせう、私はさう思ふより仕様が
ありません。宅とも色々相談致しました。こんな話が出る筈でなかつた、何ば
病氣の所爲でも、親の慈悲でも、男の面目も立てにや可かん。若しさうなれば一
家一門がどんなにか喜ぶげんごと言つて居られます。傳太郎さんも略ぼ同じ御意
見で、そやよつて、止めときてあれほご言ふたのやと、仰有つてゐらしたのを聞
きました。私は小母さんの非常な勧めであつたと思つてます。……私もネ、
僅か一ヶ月程の間に随分此の問題で苦勞をしました。他に何にも言分はないけれ
ど、兄さんが今度斯う云ふ災難に罹つた時、精神を新にして、嫂さんと結婚なす
つて、煩悶や何かを棄て、御修業を専一になすつたら何思はうと初中終祈つて居
ります！ 私は兄さんに此の際非常な大決心を促したいから、こんな失禮な長い
手紙を書きました。併し一步退いて考へて下さつたら、兄上が如何に愛されてゐ

るかといふ證據なのですよ。是れだけは、どうぞ是非お察し下さい！ お考へ下さ
い！……

未だお藤が一命を賭して認めたやうな文字が多少あつたが、喜久次は讀めば讀
むむどお春を愛すべき運命を教へらるゝの外なかつた。そしたら多日の濃霧は晴
れて、行手が指示されるやうに思へた。彼は感極つて、両手で顔を掩ふた。人間
が美と感じ善と解し眞と信じて、其れを追求した處が、夫れが果してどれ丈け眞
であり善であり美であらう乎。自分は美代子の容貌に美を認めた。鶴子の境遇に
善を……。勿論不健全な不徹底な妄動ではあつたが、子を持つた嫂よりも悪
くないとは信じて疑はなかつた。而して極力是れを追求した。其の努力の報酬
として、師に棄てられ、友に別れ、……遂には死を冀ふに至つた。他人の
無情を恨んだ自分は骨肉から恨まれ……。

喜久次は時の経過も何も彼も知らずに冥想してゐる。今宵に限らず、近頃は所信あつて沈黙を守り、陰ながら義兄の動作に注意を怠つてゐないお春は、彼が京都からの書状を一心に読み耽つてゐる容子に引付けられて、先刻から段々と近寄つてゐた。而して長く流れた巻紙を密と手にして、刻々と起る感動を抑へつゝ、讀んで行つた。其れは彼女の平素とは丸で異つた行爲でゐつたが、半ば以後になると、もう到底堪え兼ねて、わつとそこへ泣き伏した。

喜久次は叱驚した。

「あッ！ 嫂さん！ 其處にゐたのか！！」

「へーエー お手紙を拜見さして…… 姑御さんは何時お歸り遊ばすのでござ

いますか！」

「もう箱根を越えてゐる。一緒に迎へに行かうか！ もう嫂さんは呼ばないで

！！と彼はお春の手を握つた。

「あの！」と身を退いて、

「どうして妾のやうなものを……！！ 實母さんの氣隨にお腹も立ちませす……！！」

「斯うなつてもそんなにいふ位なら、何故僕を多年愛してくれたか！ 貴女は止むに止まれず愛したのでせう。報酬に焦らず真心から行つた事は、何時かはさう成つて来る。夫れ以上に善く成つて来る。其の代り努めても、求めても出来なかつた事は、其の出来なかつた方が僕等に善いのです！ お父さんはよく一心にさへ成れたらと言つてゐたが、僕は今其の眞理を漸く悟つた！！」と柱に掛けてある亡父の肖像を目成つた。

お春も其方へ眼を注いだ。

「何しろ僕は表面ばかり見てゐた根性を放擲して、貴女の其の愛に報はねば、僕等は皆な亡びて了ふ！ 小母さんも悩む!!」

『どうぞ御免遊ばして……!!』

「御免も何もない!! 是れが僕等の喜ぶべき運命だ!!」と喜久次は再び彼女の手を握つた。お春も輝いた顔付で、確と握り交した。

戸の隙間を漏るゝ白さは、月のでも雪のでも最早なかつた。「曉」の色であつた。

(完)

毒 藥 (附 録)

人物

- 學生 三浦 務
- 娘 林 初枝
- 醫師 角 田 鐘一
- 娘の母 仲 子
- 女中 一 人
- 車夫 一 人
- 場所 戸山の原の一角
- 時 現代晩秋の午後

舞臺の大方は斜半なる凹凸あり杉の木立ある心地よげの芝生にて、稍人目に

遠き隠場の形なり。廣き草原田圃など續きて、何處にも秋色溢れ、下手の奥に道路ありと知るべし。黄紅燦たる樹木人家等の背景遙に見ゆ。但し澄み渡りたる空にはあらず、風冷なり。紺緋の羽織に小倉袴、古き羅紗帽子を冠りたる丈高き方の三浦(二十七八)寢れ居れど客姿麗しき美装の初枝(二十一)に追はれ來る。

三浦、どうも困つた。

初枝、何故？

三浦、際疾い處でぶつつかつたから。

初枝、それは私が永らく念じてゐたんだもの。

三浦、會はぬ方が可いんだがな。

初枝、いゝえ、會はなくちや！

三浦、所詮仕方がないんだから、僕は矢張り失敬しやう。

初枝、(急込み)そりや餘りだわ。

三浦、(感ひつ)僕は不安で堪らない。

初枝、だって憎らしい！

三浦、ちやア止むを得ぬです。貴女もまア其處へお掛けなさい(と只ある切株に腰掛け)但し條件がありますよ。

初枝、(樹に背を凭らせて、にっこりして踞み)條件だつて、まアどんなこと？

三浦、僕は今日貴女を何とも思つてゐないと云ふ事を先づ前提にして貰ひたい。

初枝、あら(と驚き睨めて)そりやさうでせうとも。

三浦、直ぐ夫れだから、僕は逃げやうとした。貴女は最早僕とは別世界の人間でせう。だから僕が凡てを放擲してる以上は、安じて引込んでゐなさい。従前通

りが一番可いんですよ。お宅の方達がどんなに僕を遠ざけなすつたか、ちと考へて御覽。

初枝、そりやもう初中終考へてますとも。ですから、私をさう薄情な女だ、人非人だ、欺かれたッてお棄てなさらないで、私にも愛を現はす機会を與へて頂戴！せめて一日でも可いから、人間並みにして欲しいわ（と手巾を噛む）

三浦、（早口に）其れは與へた。未練至極に與へた積りです。

初枝、でも貴方は私達を困らせやうッて、理屈一點張りなんですもの。それはお母さんがあんな失禮な事仰有つたけれど、何もさう根におもちなさるに當らぬぢやありませんか。夫れには又多少情實もあつたんですわ。私は貴方にお詫しやう、お話しやうと思つて、何遍迎へたか知れなくッてよ。辛と折角行會つても、毎も病犬に出會したやうにして被居つた。そんな時女は、どんなに落膽

すると思召して！口惜しいやら恥かしいやら、ほんとに侮辱を感じたわ。

三浦、（稍怫として）さう言はれると僕も黙つてゐにくいが、娘には既に定まつた縁邊がある。直接面談は平にお断り申すと宣告された貴女に、どう顔が會はされたもんか。そんな事なら、……。

初枝、慌て、遮り、力めて静に其れはね、貴方が正直過ぎるからよ。でなかつたら、貴方は迷つて被居つたの！私に意味が無さ過ぎたのよ。

三浦、（氣先き折られて）中々美味しい。ぢやア貴女は、僕に不真面目を要求するんですか。

初枝、いゝえ、だけどもねね、あゝ露骨に仰有つちや、誰かて憎らしいわ。宛然私を見切物のやうにして被居るんだもの（と急に消れる）

三浦、（情けないといふ表情にて）そら不作法だつたかも知れぬ。併し彼の場合

僕の方では、媚び諂ふやうな文句はごうも吐けなかつた。而して境遇が非常に懸隔れてるから、あんな申越をする氣は素々なかつたのです。けれども僕の交際してゐた人は遠ざけられるし、其れが馬鹿々々しい。三浦は大家の令嬢に乘換へて、私慾を満さうとしてゐる、野心家だ、卑劣な男だと云ふ悪評になつて來る。だから僕は、貴女が愛してくれるならと、受動的に言つてのけた。其れが貴女の矜持を傷付けたのでせう。けれどもねえ、初枝さん。僕は其の報いを十分を受けた。恐らく苛酷を受けた。こんな事は今更云ひたくないが、貴女が不平をいふからは非がない。學校は素より社會へ顔出しの出來ないやうにされたんぢやありませんか。どうぞしてと思つてやう辛と起上つて行くと、理不盡に刎ね附ける。幾ら絶つて行つても振り落す。其の都度僕の心臓は刎ぐられて、荒されて了つた。何處の國にか戀の苦い方面だけこんなに嘗めた男はなからう

よ。

初枝、(枯草を弄りながら) 其れはね、貴方が女の心持にお察しがないからよ。

三浦、どう察するんですか(と自づと激しく) 只愛の爲めだと讓歩して、死に優る凌辱をも忍んで來た。女には女の長短のあるもんだと思遣つて、一言も抵抗しなかつた。人格を蹂躪されて、自尊心に冷水を浴せられるほど辛いことがあらうか。而して僕が、彼方でも此方でもフットボールのやうに蹴られてるのを見てゐながら、端書一本寄越さぬのみか、未だ其の不實呼ばはりだ。(初枝泣いてゐる) 其れは貴女、迎へてくれたかも知れぬ。いや其れは知り過ぎる程知つてゐた。其のお蔭で釣込まれて、僕は段段止むに止まれぬ戀に陥つた。而して手から足、胴から首とすたくに切刻まれた。彼の時僕が何かして置いたら今頃どうなつてゐやう? 何ぞ落度がないかと鵜の目、鷹の目、餘り持込んで了

つて、破壊するには自分の真心が惜し、何か彼んかで、いつまでも此の通り破れ袴の苦學生です。へんお察しのある方は違つたもんだ。

初枝、(聲を絞る) 字が下手なもんだから、幾度書きかけたか知れないけれど(間)それに只もうはらくしちやつて、若しか貴方に……。

三浦、(嚇として) 何だ、つべこべと。當然なら、斯う叩き潰して置くんぞ(と洋杖にて地を打つ)

初枝、え、さうよ。其れが私のお願ひよ(とたしなみを忘れて取付く)

三浦、(はつと飛び退き) 茲だ(と氣を鎮める科介あり、やゝ經て左あらず) どうです? 景色の佳いことは。日が照つたり曇つたり、時雨れても來ませう。雲の波は動く。色づいた梢は揺れてる。群鳥は騒いでる。僕等は詩的情想が零がから駄目だが、眼さへ見わたたら、……。

初枝、(代株に腕を靠らせ、喘ぎ) 丁度私の身の上だわ。散々顔を紅めて、風に揉まれて、落葉になつて、終ひに焼かれて了ふのよ。

三浦、夫れだから可いんですよ。古いものは焼かれて、さつさと新しくなる。落葉は新芽の萌出す爲めなンさ。(間) オア彼處を散歩して新夫婦を御覽!

あの楽しさうな嬉しさうな、彼の幸福な身の上が貴女に今や逼つてゐるんでせう。初枝、何を仰有つて被居るの?

三浦、そんなら訊くが、結婚式は何時ですか。

初枝、(吐出すやうに) 何でも明日のやうですッて。

三浦、(苦く頷き) それちや丁度善かつた。貴女が餘り異なこと云ふから、僕は多少逆ついたが、今では何にも悪感情を持つてゐない。どうか平和な家庭の天晴主婦になつて戴きたいと、實は祈つてゐるんですよ。之れは間接ながら傳へても

置いたし、僕の是迄の行動でさう信じて下さりさうなもんだ。それに、今日計らず斯う出會つたから、僕は氣が晴々して來た。言は、流石の自惚も一寸裏書きされたやうで、もうくさッぱり帳消しさ。

初枝、(口惜しさに) 厭な女が葬られますからねえ。

三浦、餘程ごうかして被居るよ、貴女は。

初枝、ごうかしませいで？ 三年も四年も愛し合つてゐた貴方が、私の壓迫されるのを喜びなされるンぢやありませんか。そりやねえ、貴方のお心はどんなにか感服してますよ。だけでもねえ、さう私を冷血動物のやうに決めて了つて、遠方から聖人振つて被居るのが戀の道でせうが、貴方はもツと情の深い優しい方だと思つてました。幾らでもお蔑視みなさいまし。

三浦、こりや驚いたが、聖人とは難有いから、ぐツと聖人振つて、何も彼も煙に

して置かう(と紙巻蓑に火を付ける)

初枝、まア憎らしい。もツと仰有つて下さいましよ。

三浦、(遠に嫉妬其の他の雑念に驅られて、四邊をぶらつきながら) あらまア、姫様、先刻から大騒ぎなんでございますよ。お聲さまがそれはくお待らかね。こんな處に御座あつては兵隊さんの鐵砲玉が飛んで参りますよ。あツかない、みツとむない、さア斯うお出でなさいまし。

初枝、(眞紅になつて) さうよ、其れが聴きたくツて堪らないのよ。私は有力なものの持つてるから可い。

三浦、お羨しうございます。

初枝、(涙を振つて) どんな物か知つて？

三浦、どう致しまして、……。

初枝、躍起になり、何か持つてゐなくちや、こんなにして居れるもんですか。モルヒネに亞比酸、それに未だあるわ。頑固な伯父さんの處から盗んで来たのよ。貴方は死ぬのはお厭でせう。死ねないでせう、新しい戀が又幾らでも出来るから。もう何をしてゐらッしやるかも知れやしない。私、まアどうしやう!?

三浦、あゝ(と嘆息して)大分勝手が違ふ、弱るなア

初枝(方を籠めて)どうせ貴方は、私が泣いたッて笑つたッて、何を彼の古狸がと思つて被居るでせう。だけでもねえ、貴方をあんなに苦しめて置いて、其れが平氣で他所へ嫁かれたもんでせうか。如何ほど私が見下げ果てた女だからッて。他人を殺せば殺されます。(間)そりやねぬ、今更こんな事言はれた義理でないことも知つてますよ。私は貴方を疑つてました。恐れてもゐました。ほんとに淺幕でした。家庭の壓迫に些とも克ち待ないで、お父さんや伯父さん達が無

暗と誤解して被居るのを、おろ／＼見てました。陰で泣いてばツかりました。だけでもねえ、三浦さん(と濕んだ眼で屹と見る。)

三浦、避けたき氣味にて)何です?

初枝、私はねえ、貴方がお嫁さんをお娶ひなすつたら、恨んで／＼、恨み殺さにや措きませんよ。

三浦(十分力めて柔かに)そんな事があれば可いが、貴女は僕の精神状態や環境遇を知らないから、艶ッばい小説にでも感化れて被居るンでせう。もう言ひッこなし!餘り云はれると、厚氷がじめ／＼解けて来て、右疵に血が染む。どうです? 膏藥代りに其の毒藥を僕にくれませんか。

初枝、それちやア(とつかぬ面色)

三浦、處女時代の斷末魔で素晴らしい狂言の出来る人だから、どんな氣紛れをや

るかも知れない。それでは虹蜂取らずで、僕の微衷もフイになる。だからさア下さい（と少々近寄る）

此の時背後より林家の車夫竊に出て、驚きの科介あつて退場。二人は知らず。初枝、（凝然對手を目成り）そしたら、どんな報酬を下すつて？

三浦、其の貰ふ事夫れ自身が報酬なのです。

初枝、でもそればかりでは………

三浦、さア早く。此處が解らぬか、茲が（と己が胸を叩きつゝ）人目に懸つちや可けないから。

初枝、解りませんもの！

三浦、ちやアもう可い（と退く）

初枝、いえ、上げます（と無中で絶り付き）ですから何處かへ連れて行つて頂

戴!!

三浦、馬鹿な!!（と劇しく振飛ばし）そんな戯談が出来るもんか!!!
初枝、あれー!!!（と地に仆れる）

三浦、（去らんとせしが、又氣を取直し、女の側に爪立て坐り、眞摯の態度にて）
貴女はまア、それほど僕を思つてゐてくれたンですか。さうとは僕も知らなんだ。其のお志は衷心から感謝するがねえ、初枝さん。所詮貴女とは潔く別れにやならぬのです。（初枝かぶりを振る）いや全くさうです。だから僕は斯う退いてるンですよ。まアお聞きなさい、曾て何か立入つて交際をして置いたのなら、僕もこんな窮屈な真似はしない。けれども、丸で握手一つせぬのおやありませんか。而して事茲に至つた以上は、是れが僕の最深最上の愛ナンです。他人はおろか肝腎の貴女でさへ同情してくれない愛ナンです。（初枝道瀬なく泣く。

三浦も涙含み、そりや人間の情緒は複雑なもんだから、僕も随分と貴女方を憎んでゐた。牛首の二つや三つは貰はにや措かぬと業を煮した。幾度か自殺も企てた。けれども其れを何時も凝然耐へた自制力はね、一つは僕に母親があるからですよ。あながち孝は百行の基を擔ぐ譯ではないが、恩義に背かれらや辛いから、僕も親の恩愛に背くまいと思つた。之れは極く平凡な理論で、其の平凡な理論を聊か適用したから僕は、どうにか難局を切り抜けた。そしてこんな非人情な應對さへしてゐる。兎角人間は素直に従順に堅實に勵んでゐたら、屹度活路も開かれるし、長閑な自由の春も見舞ふから、貴女も是非さうなさい。ねえ、初枝さん、其れが平和を愛する人間の道ですよ。貴女は實に危急存亡の……。

初枝、(泪の顔を昂げて、言葉を挿み) それぢやねえ、貴方はそんなに恩義を尊ん

でゐらして、私が貴方に……。

三枝、(おひ被せ) だから僕は、貴女に小を去つて、大に就かせたいんです。貴女は幾等とは違つて、非常な親の恩義を受けて被居るんでせう。世には親の貧苦に身を沈める女もあれば、工場で埃だらけになつてゐるものもある。早晚喰ひ物にされる筈で、三味線の稽古を強いられてゐる小娘もあらう。そんな婦人等の親でも親は親だに、貴女はごうですか。榮耀榮華に育つて、令嬢淑女と崇められて、有に一家族位は金利で支へられるやうな高價のピアノを弾いたり、腰辨の二三年にも比敵しさうな贅澤な服装をして、米の相場は知らずに……。

初枝、(泳へかねて嘆願の利介にて) もうくどうぞ堪忍して頂戴！ それやねえ私も幾乎知つてます。他人を殺せば殺されると思つてますの！ 他人に對しても親にでも、恩義に異りはないんでせう。そしてねえ、宅のお父さんやお母

さんは何もさう壓迫するンぢやありませんよ。貴方は二口目に境遇が違ふとか貧乏だとか仰有るけれど、其れは些と貴方の例ではないかと、ほんとに私、齒痒いわ。お父さんだッて伯父さんだッても、矢張り苦學をなすつたのですッて。そりや伯父さんはあれだけれど。嫌はれてゐて親切にされるほど、悲しい事はない！

三浦（張詰めし氣力次第に抜け）今更何と云たッて仕方がない。辛い悲しいは何方がどうやら……。

初枝、そんなら何故貴方は、親の恩を楯にさうお苛めなさるの？ 古葉は新芽の爲めに落ちるとか仰有つたぢやなくッて？

三浦、其れは下らぬ詭辨です。人生は複雑なものだから、大小輕重を誤つては可かん。

初枝、だッても、私には貴方が一等大切なンですもの。愛想の盡きたは御道理だけれど……

三浦、愛想の盡きた女に、こんな口泡飛ばしてゐる男はあるまいさ。
初枝、そりや眞實！

三浦、嘘だか知らぬが、どう云ふものか貴女ばかりは疑へなかつた。それで其の眞心を惜んで、僕は能きる丈け貴女を幸福にしたいと思つたけれど、悉く背かれた。先刻からの談話があれで最後の勢一杯なんです。どうも貴女は譯の解らぬ人だ。僕は一面臆病で、涙脆い。横暴な奴には随分捨身で枯杭するが、さう泌々言はれると、直ぐ自分の心で打算して變になる。（初枝じりく躡寄る）而して一步步々斷頭臺へ引摺られてるやうな氣持がする。不安で堪らない。何だか男に愛さしてやるのが大變な功德だと思つて居られさうで、餘裕のない

僕等には到底お相手が出来ない。(極く暫く間)こんな冷たい皮肉な、血潮の濁された男の側に惑々してないで、優しい蜜のやうなお方の處へ行つたが可さうなもんだ。貴方の周囲には僕の敵が……。

初枝、(身を投込み)もうほんとに貴方、後世だわ!……、いえく放さぬ、どうしても放さぬ! 手足の爪を剥しても!!

三浦、そりや淨璃璃の文句だ。夫れにはその人が……。

初枝、いゝえ、私はもう貴方を放れては駄目です! 私が皆な悪かつたのですから、堪忍して頂戴な!! よう、お願ひだから!!! (と懸命に纏はる)

三浦(最早拒みかね)此の上はごうなツと成れ! 僕も最早堪らぬ!! (と女の背中に俯向く)

風騒ぎ杉の枯葉落つ、夕焼の雲赤し。肥滿せる中年の角田、行届きたるドク

トル好みの扮装にて、林家の女中を従へ急ぎ登場の

角田(怒氣を含み、三浦の襟頭を捉へ)コラ君。一體どうしたんだ?

初枝、あら伯父さん! (と恟恟として飛退き、蒼白になる)

女中、まアお嬢さま! (近寄り介抱する)

三浦、(覺悟を決めて)御覽の通りです。

角田、實に不届な色魔だ。(と尻目に向け、初枝に)お前も亦どうしたんだ? 竹や、早く連れて歸れ。

初枝、(屹として)餘計なお世話です。私は歸りませんよ。

角田、何有? (と慨嘆の科介)

女中(密に)さアお立ちなさいまし、お嬢さま。彼處に奥様がお待たせでございますから。

初枝、え！ あのお母さんが！

角田（女中に）愚圖々々言はずに、引摺つて行け！

初枝（氣を變へ）おせっかいですよ。私は私の足で行きます。（と起つて、首垂れ居る三浦に）お負けなすつちや可けませんよ、ほんとに意地悪だから。（と心を後にあたふた退場）

女中呆氣に取られて續く。

角田（三浦の袖を引き）君、一寸僕の宅まで来てくれ。

三浦（振つて）折角ですが、行きません。

角田、ちやア君は僕に反抗するの。婚禮最中の娘を勾引して、晝日中に唾棄すべき醜行に及んでる。是れでも君は、君の行為に責任はないと云ふのか。

三浦（無念がり）知りませんです。

角田、君は何と云つて、僕に誓つた？ 初枝とは斷然交通しない、面談もしない、

無い縁と諦めるときッぱり言つたぢやないか。角田は傲慢だ、侮辱するツて非常に憤慨してゐるさうだが、僕はまさか是程不徳漢とは思はなんだ。一片の義氣ある青年として、私かに望みを囑してゐた。然る何ぞや、（三浦いたく悶ゆ）君はそんなに口惜しいか、無念な。

三浦、無念です。殺して下さい。

角田、いや、夫れには及ばぬから、君は君の行為に責を負ふて、男らしく辨明したまへ。特に其の時間は與へてやる。一知半解の身を以て、良家の家庭を亂し、處女の精神を汚し、剩さへ多忙なる僕等に甚大なる迷惑を懸ける。嘗に迷惑のみならず、事若し縁家へ聞てへなば、初技一生の破滅になる。媒介者たる僕は名状すべからざる難關に陥る。是れが自負尊大、僕等を目して俗物と怒號する

君の行爲と云へるか。さアどうだ、肝魂据ゑて、返答しろ。夫れ相當の覺悟がある。

三浦、(肩を張つて、面を昂げ)如何なる覺悟ですか。僕は貴方には絶望してるから、此の際辨解しても駄目だらうと思ひます。心臓の脈搏は解つても、僕等の精神状態はお解りにならぬのです。併し僕は貴方に誓つた言葉を破つた。遺憾ながら餘儀なく破らされた。其の罰を受けん爲めに、殺して下さいと云ふのです。

角田、君は實に狡猾極る奴だ。誰も殺すと云つちや居らぬ。

三浦、併し貴方は(と積憤進り)曾て僕に死なうと死ぬまいと君の勝手だと仰有つた。斯る冷酷なる言葉をあゝ云ふ場合に然も面前に於て吐かれた人は、全世界に貴方あるのみです。此の一言だけは死んでも忘れぬ。(角田遮る)僕甚

だ下賤なりと雖も、かくも呪はるべき不義は働いて居らん。此の問題に限つては、伏仰天地に愧ぢぬのです。唯人間の至情に驅られて、煩悶を極めた窮境に附込み、貴方は僕に失戀で死ぬ男もあるさうだとか、何だとか、無暗と冷笑した。人間、愛に躓いた程不幸はない。僕は是れが爲め凡ての希望も信仰も破壊された。殺してなら何時でも……。

角田(鋭く打消し)コラ、君は物の表裏を辨へぬから駄目だ。だからさう云ふ馬鹿げた固定妄想に囚はれてるんだ。まア聽け、勿論僕は君等のやうな情熱家ではないが、何も君を呪はう筈はない。素よりそんな必要は認めぬのだ。けれど、初技は僕の姓だ、同胞の娘だ。然して君が彼女と交際を始めた以前から僕が仲介者になつて、さる方へ縁付ける約束にして置いた女だ、可いか。其處へ君が結婚を申込んで来たから、僕は止むを得ず謝絶の勞を執らねばならな

つた。其の仕方が冷だとか酷だとかで、僕を恨むのなら存分に恨め、僕は臨機の妨御をするまでだ。

此の時より背後の樹間に初枝母子の姿隠現す。母夫人仲子は四十年配にて質素に氣取りたる扮装なり。

三浦へ悲痛に逼られつゝ、其の御心配は御無用でせう。僕は謝絶の態度如何くらゐで、復讐を企てるほど小人物ではない積りです。許嫁がありながら妄に男子の情操を翻弄するやうな女なら、其れは僕に關係のない淫婦です。而して貴方の口から漏れる冷血な言葉を一々氣にして、武士道を濫用してゐたら、幾度か血を見ずば止まなかつたでせう。こんな事は云ふだに涙が滴れるが、貴方は先輩で成功家だから、待遇の如何に依つては、僕は何卒御誘導をと手を着きます。けれども貴方は事の真相を確かめずして、無暗に僕の有りもせぬ人格を蹂躪

なさる。悪辣な中傷謔を極めて、僕さへ離間したら、貴方の目的は達せられると思つて被居る。其れが無念なやら笑止なやら、寧ろ死んで了ひたい。

(間) 先刻からの談話でも多少公平に訊いたら、どうして色魔だの醜行だのと酷評されやうか。果して僕にそんな行爲が微塵でもあつたら、貴方は反對に僕に謝罪らんならぬのでせう。餘り事實と懸隔れてるから、其處に僕の隠場はあるものの、貴方がさう傲然と構へてゐらツしやる間に、貴方の大事の姪は何を試みてるかも知れませんが。何か薬局から紛夫してあるかも知れぬ。(間) 噫、張合ひのないことだ。情けない身の上だ。貴様は片輪だくと極付けて、尋常の人間の手足を切つて了つて、それ見ろ、片輪だと笑つてる。偶々此の邊へ散歩に来て、計らず出會つて、散々挑まれて、犠牲を拂つて談話を一寸したばかりで、僕はこんな侮辱を蒙らねばならぬ。夫れでも此の苦痛を忍ばねば、半生

の忍耐が無意味になる。だからもう真心だけ殺さないで、不如此の生命も取つて貰ひたい。ああ（と凄然俯向き男泣きに泣く）

初枝 駈出でんとすれど仲子肯かず、荐りに跪く科介あり。次の角田の會話中にも再三斯くありと知るべし。

角田（葉卷菘を喫しながら）もう饒舌り疲勞れたか。君の口吻は恰も誇大狂のやうだから、僕は法醫學上君の一切の責を免じて、治療法を授けてやらう。君は初技が惚て居ると云ふ妄想が、痼疾になつてゐるのだ。そりや時には彼女も顔位は赤めたらう、處女の表情筋肉は鋭敏なもんだからな。（三浦耳朶を塞ぐ）さう振らずと、醫師の忠告を聴け。君は常識を以て判断せぬから困る。初枝は明日結婚する女だよ。其の女にだ、事實其の意志がないとすれば、多日進捗し來つた準備中に何故あゝ平然として居れるもんか。若し彼女が今日君に、戀しい

とか懐しいとか、何とか口説いたとすれば、其れは畢竟君の疾病を癒す一大手術に過ぎぬのだ。君のやうな執念深い男に附纏はれちや、そりや誰かて堪らぬ。だから毒藥とか、犠牲とか方便を云つて、一寸君を喜ばす必要が起つたんだらう。（三浦彌々耳朶を塞ぐ）其の手付きでは未だ聞こえる。いやもう一言是非聽いて置かねばならぬ。君は以前から神經衰弱に罹つてゐるよ。そんな頭腦の精神的現象はな、決して客觀的實在の證左ではない。誤つた想像力ほど所謂毒藥はないから、須らく幼影を棄てたまへ。是れが君に與ふる最後の處方箋だ。（角田退場）

初枝 駈出で、詫びつ唧ちつ泣いつ勦りつ、様々すれども、三浦仆れ居て少しも答へず。

仲子、（悲しみ嘆きて三浦の側に寄り、）其の御立腹は御道理でございます。私共

が皆な行届かなかつたのですから、どうぞお許し下さいまし。角田は何もの、ではないのですけれど、色んな事情がありますんで、一國な御無體を申したの、でございませう。ですからどうぞ、今迄の事は私に免じて、暫く御辛捧下さいまし。屹度貴方のお顔は私がお立て申します。お志は決して……。

三浦（黙しかねて雑返し）奥様、どうか貴女も角田式に取扱つてくれませんか。僕は素敵な妄想狂だから、若し貴女方が他の人だつたら、負つて貰つても、巢鳴へ行きたい位です。こんな氣狂ひなんか構つてゐないで、さつとお歸りなさい。もう日も暮れて来た。

仲子、そんなに仰有つては、私共がもうほんとに……。そりやもう貴方ならこそでございませけれど、板狭になつた母親の心の中をお察し下さつて、どうぞねえ、娘ともお話し下さいまし。巢鳴だの氣狂ひだの仰有つては、如何に不

束な私でも此の胸が張裂けんばかり……。……！（と両手で胸先きを抱へる）

三浦（眞顔になり）承知致しました。是迄も可なり察して来た積りですが、僕のできる範囲でお察し申しませう。其の代り貴女にも些と察して戴きたい事がある。貴女がお子供衆の爲めに御心勞遊ばすと同様に、僕にも僕の心事は殆んど解らずに案じてる母親があります。其の母に、今日云々の目に遇つて来たと言つては歸れない。どうしても暫く此處で精神を沈着けて、涙を秘して歸らにやなりません。だから僕は、貴女方に早く此の塲を引取つて下さいと云つてゐるのです。

仲子（情緒を抑へて）さう云ふ氣高い思召しなら、喜んで御遠慮申します。では御免遊はしまし（と行きかける）

初枝（おどく）何處へらつしやるの？ お母さん！